

御吉凶事并  
小金御鹿狩一件  
新古改撰誌記  
卷之十一

(朱書)  
「五百四十五」  
「老」

御中間頭  
江  
御小人頭

此度 若君様 御誕生被遊候ハ、御中間・御小人勤番并 御  
城内 御成之節御供人数取調可差出事

(朱書)  
「文化十四」八月

三宅市右衛門  
本多作左衛門

右八月十三日 御産御用掛御徒目付大森大三郎より差越、承附相  
返ス

此度 若君様被遊 御誕生候ハ、御中間・御小人勤番并 御  
城内 御成之節御供人数左ニ申上候

一、御中間頭  
之内  
御小人頭

老 人

右者老役老人宛相詰罷在候間  
公方様  
大納言様 御一同 御成被 仰出候節者 若君様御供西丸御使  
若君様

組頭為相勤可申候

一、御小人目付

三人

一、御草履取

老 人

一、御持鐘之者

三人

一、御長刀役

老 人

一、御小道具之者

九 人

一、御使之者

五 人

右者御先例 若君様御供御中間・御小人人數書面之通御座候、  
然処当時御余慶之御人無之候間 若君様 御誕生之節者早々  
御人被 仰付被下候様仕度奉存候、尤差掛り候儀者西丸勤役之  
者并 御本丸勤之者も差加為相心得候様可仕候、依之申上候、  
以上

酉八月

御中間頭  
御小人頭

右老通八月廿九日西丸懸り御徒目付中村専助江柳田久左衛門より  
差遣ス

(朱書)  
「式」

御中間頭  
江  
御小人頭

大納言様 御城内 御成之節夜中者御使組頭老人泊ニ而相心  
得候儀与存候

若君様被遊 御誕生候日より夜中御供之儀心得方明日中取調可  
差出候事

八月

三宅市右衛門

本多作左衛門

右者八月廿九日西丸より御使之者を以差越、拙者・久左衛門致承附遣ス、九月朔日御供にて小永井惣太夫西丸江罷出候節若君様 御誕生被遊候者夜中御供両丸御使組頭ニ而為相心得候旨懸り御徒目付江口上ニ而惣太夫申達候旨当番衆右衛門申越候

覚

御産御用ニ付

御小人目付

御使之者

御中間

御成御用

御小人

御挑灯持

七人

拾人

五人

拾人

拾人

右者宝曆六子年於西丸

御産之節御当り月より書面之通昼夜

増詰切被仰渡候、以上

西八月

御中間頭  
御小人頭

右八月廿九日川村助左衛門江柳田久左衛門より遣ス

覚

御産御用ニ付

御小人目付

御中間

御小人

式人

三人

拾三人

右者宝曆六子年

御産之節御当り月より書面之通昼夜増詰切被

仰渡候、以上

西八月

御中間頭  
御小人頭

右同日西丸中村専助江久左衛門遣ス

(粹朱引)

(朱書)

〔三〕

黒鋏頭  
御掃除頭  
御中間頭江  
御小人頭  
御駕籠頭

(朱書)  
〔不用〕

黒鋏頭  
御掃除頭  
御中間頭  
御小人頭  
御駕籠頭  
部屋住之者妻共

右者此度於西丸

御誕生之節御乳持御用ニ付出産後七十五日

相立候者も書出し候様被仰渡候ニ付、来ル廿九日迄有無共可申

聞候、尤乳筋吟味之節着服之儀小紋ニ而も縞ニ而も不苦候、且書

出方之儀者是迄之通可心得候事

八月廿六日

村上監物  
小菅猪右衛門

右小野伝左衛門相達致承附遣、同月廿九日左之書面同人江達ス

私共并梓共妻之内当時出産之者無之御乳持御用可言上者無御座

候、依之申上候、以上

西八月

黒鋏頭  
御掃除頭  
御中間頭  
御小人頭  
御駕籠頭

(朱書)

〔四〕

於西丸 御誕生ニ付夜中

御成被

仰出候節、

御注進御役・

御道具持人・御小人等且 御成御跡御用之程難計奉存候ニ付、  
先年之通増泊之儀左ニ奉伺候

御徒目付 貳人  
御小人目付 七人  
御使之者 拾人  
御中間 五人  
御成御用 拾人  
御小人 拾人  
御挑灯持 拾人

○ 此五ヶ条之者宝曆六子年於 西丸御産之節、御当り月よ  
り増泊仕候由御中間頭・御小人頭申聞候

右之通増泊被 仰付候ハ、御間ニ合可申哉奉存候、御使之者之  
儀者拾人之増泊にてハ中々間ニ合候程難計奉存候ニ付、御産之御  
催有之候ハ、呼上申遣次第三組申合、早速差出候様被仰渡候様  
仕度奉存候、以上

川村助左衛門  
石川三郎兵衛  
竹内源右衛門

附札

書面之通相心得呼上之儀御小人頭江兼而申談置御間ニ合  
候様可致候

右書面九月十二日正木伴蔵差越承付いたし候而遣ス

(朱書)  
「五」

御中間頭江  
御小人頭

御産御用ニ付取扱相勤候御小人目付并当番御小人目付昼夜増泊

詰切候ニ付、只今迄之部屋手狭ニ付御玄関前腰掛・二階御持鑓之  
者部屋右御用中増泊御小人目付仮部屋ニいたし、御持鑓之者者御  
長刀役之部屋江打込罷在候様可申渡候事

三宅市右衛門  
本多作左衛門

右九月十九日西丸当番所より差越候間承附いたし返上、定蔵を以  
御持鑓江為申渡候事

(朱書)  
「六」

臨時  
御台所江御断  
覚

村上監物  
小菅猪右衛門

御小人目付 七人  
御中間 合 五拾四人  
御小人

右者於西丸御産之節右御用并急 御成御供之者共書面之通り増  
詰切仕候ニ付、十月朔日より御用相濟候迄朝夕御夜食共御台所  
引支度被下候様、御断被仰渡可被下候、以上

御中間頭  
御小人頭

御作事方江御断  
覚

村上監物  
小菅猪右衛門

右者於西丸 御産之節右御用并急 御成御供之者共御多門之内  
増詰切仕候ニ付、御玄関前御多門之内仕切差置申度奉存候、豊  
三拾疊并仕切等出来候様仕度奉存候、以上

御中間 合 四拾四人  
御小人

西九月

両役名

〔朱書〕  
「此疊先例縁付之処、此度者御疊奉行松島十左衛門より懸合有之、琉球表無縁ニ而出来候、尤御仮物ニ付右之通ニ而も差支無之事ニ候、為見合記し置」

臨時

御賄方江御断

覚

村上監物  
小菅猪右衛門

一、手桶

但割蓋付

式ツ

一、搔器

一、しゆる箒

式本

壺本

右者於西丸 御産之節、右御用并急 御成御供御中間・御小人増詰切仕候ニ付、右部屋江受取申度奉存候、御用相濟候ハ、返納可仕候、以上

西九月

両役名

臨時

御細工所江御断

覚

村上監物  
小菅猪右衛門

一、鉄行灯

但網掛小道具共

三ツ

右者於西丸 御産之節右御用并急 御成御供御中間・御小人増詰切仕候ニ付、右部屋々々江受取申度奉存候、御用相濟候ハ、返納可仕候、以上

西九月

両役名

臨時

御勘定所江御断

村上監物  
小菅猪右衛門

十五日分

覚

一、油合三升三合七勺五才

但壺ヶ所一夜ニ付

七勺五才ツ、灯心共

右者於西丸 御産之節右御用并急 御成御供御中間・御小人増詰切仕候ニ付、右部屋々々江灯候間十月朔日より十五日分御用相濟候迄、書面之通受取申度奉存候、以上

西九月

両役名

右五通り御掛り駿河守殿小札付、九月十九日口上添小野伝左衛門を以出ス

西丸御用

御台所江御断

覚

三宅市右衛門  
本多作左衛門

御小人目付 五人  
御中間 合 式拾壺人  
御小人

右者 御産御用ニ付増詰切仕候間、十月朔日より御用相濟候迄朝夕御夜食共御台所引支度被下候様御賄方江御断被仰渡可被下候、以上

西九月

御中間頭  
御小人頭

西丸御用

臨時

御細工所江御断

覚

三宅市右衛門  
本多作左衛門

一、鉄行灯

但網掛小道具共

三ツ

右者 御産御用ニ付御小人目付・御中間・御小人増詰切仕候ニ付、右部屋々々江受取申度奉存候、御用相濟候ハ、返納可仕候、以

上

西九月

両役名

西丸御用

臨時

御勘定所江御断

三宅市右衛門  
本多作左衛門

覚

一、油合三升三合七勺五才

但壺ヶ所一夜ニ付

七勺五才宛、灯心共

三ヶ所分

右者 御産御用ニ付御小人目付・御中間・御小人増詰切仕候間、  
右部屋々々江灯候に付、十月朔日より十五日分御用相濟候迄書  
面之通受取申度奉存候、以上

西九月

両役名

右九月廿三日駿河守殿西丸壺岐守殿小札付懸り江小右衛門差出ス

(朱書)

一、御本丸増泊御注進御使五人・御小人方増泊江助ケ六人、右者野方

御使勤番御用方并昼番御用除打込罷出候、手桶二ツ・搔器式

本・しゆる箒壺本者御多門詰江渡、鉄行灯三ツ内壺ツツ、御持

鑓・御小道具之者部屋・御多門右三ヶ所江渡油是三准し、尤何も

昼者詰兼也

一、西丸増泊五人者西丸野方并御用除御小人方江、助ケ四人ハ御持鑓

役西丸勤より昼夜詰兼鉄行灯三ツ内壺ツ充、御小人目付泊等御

持鑓・御小道具部屋江引分渡油准し之

(朱書)

「七」

西丸御徒目付組頭  
御中間頭  
御小人頭  
西丸御駕籠頭  
江

御徒目付

御中間頭

御小人頭

御駕籠頭

御小人目付

御草履取

御持鎗役

御長刀役

御小道具役

御使之者

御駕籠之者

御城内 御成

右者此度 若君様被遊 御誕生候節、右之分 御城内 御成

御供割都而 大納言様御行列之通相心得可申渡旨、駿河守殿被

仰渡候間被遊 御誕生候日より日々当置可申候、尤日々当番

二而御供相心得別段御供割不致候歟又者泊等致候哉、右之訳巨細

九月

村上監物  
小菅猪右衛門  
三宅市右衛門  
本多作左衛門

(朱書)

「八」

御中間頭江

御小人頭

御留守居より断

御使之者

七人  
拾四人

右者 御誕生御用ニ付来月朔日より昼夜詰切候様可申渡事

九月

三宅市右衛門

本多作左衛門  
右九月廿四日西丸河合儀左衛門差越候ニ付、承附いたし遣ス

(朱書)  
「九」

此度 若君様被遊 御誕生候節 御城内 御成御供割都而  
大納言様御行列之通相心得被遊 御誕生候日より日々当テ置  
可申旨被仰渡、且右御供当番ニ而相心得候哉、又者増泊等為仕候  
哉之旨御尋ニ付左ニ申上候

御中間頭之内 忝 人  
御小人頭

右者当番ニ而御供相心得申候、若  
公方様  
大納言様 御一同 御成被 仰出候節者忝人手足不申候間  
若君様

若君様御供西丸御使組頭為相勤申候

但組頭引後者 御本丸・西丸御使組頭当番忝人宛にて御供相  
心得罷在候間 若君様御供両丸御使組頭之内忝人増泊可  
為仕候

御小人目付 三 人  
右者西丸御小人目付明ケ番之者居残り御供為相心得夜中者八人  
泊り罷在候間差懸り候節者、右之内ニ而相心得追々呼上ケ為相勤  
可申候

御草履取 忝 人  
右者西丸当番詰切忝人ニ付別段両丸御草履取之内忝人増泊可為  
仕候

御持鍵之者 三 人  
右者明ケ番之者居残り御供為相心得夜中者四人泊罷在候間、別段

忝人増泊可為仕候

御長刀役 忝 人  
右者西丸当番詰切忝人明ケ番之者居残り加番仕罷在候間、右加  
番之者御供相心得、夜中者両丸御長刀役之者忝人増泊可為仕候

御小道具之者 九 人  
右者明番之者居残り御供為相心得夜中者九人泊仕手代りも有之候  
間、差掛候儀者右人数之内ニ而相心得追々呼上為相勤可申候

御使之者 五 人  
右者明番之者居残り為相心得夜中者拾人泊仕罷在候間、右之内ニ而  
為相心得追々呼上為相勤可申候

御中間頭  
御小人頭  
右者 若君様御人被 仰付候迄之内 御城内御供書面之通西丸  
役々之者より為相勤可申候、依之申上候、以上  
西十月

御注進御使之廉先例無  
右忝通十月三日西丸上野勘兵衛江遣ス、且御注進御使之廉先例無  
之ニ付除候処、十一月二日於西丸堀越又右衛門より由右衛門江談  
有之、依之猶評儀之上西丸野方三人御供心得之儀も翌三日組頭林  
蔵を以為申渡候

(朱書)  
「拾」

覚

御注進御用 五 人  
御産御用増泊  
御小人拾人之内江  
御持鍵之者 六 人  
同断ニ付西丸江増泊  
此五人西丸野方御使并

昼番御用除より三人  
御本丸より式人

御小人式拾壹人之内江

五人 △

右同断之内江

西丸御持鍵役より

昼夜詰兼

四人

△

西丸増泊九人之内御目付方御用式人  
其余者御広敷向之御用申合可心得候

右者於西丸 御産之節為御用十月朔日より御用相濟候迄昼夜増詰切可心得事

一、御産御催有之候得者急西丸江被為 成筈ニ付、御持鍵役・野方御使等致手廻御供可相廻事

一、同断之節御供方平服ニ而相廻西丸ニ被為 入候内 御誕生ニ候得者熨斗目麻ニ着替御誕生後 御成之節も同様之服ニ候間、其節者御道筋御門番人麻上下可着用事

但御先例御風呂屋口より御玄関前中御門・蓮池・西丸御裏御

門通り御玄関より被為 成候趣ニ付、右御道筋御番所向兼

而相心得罷在夜中之 御成ニ候ハ、台挑灯等差出方手繰可

致、尤御蠟燭受取置候様ニも可致事

一、御誕生ニ付惣出仕之節 御本丸・西丸熨斗目半袴、二日目より六日目迄西丸服紗小袖麻上下 御本丸者平服、御七夜御祝儀惣出仕之節者 御本丸・西丸熨斗目半袴 二丸之儀者 御本丸之通之着服ニ候

右之趣其筋々江申渡候事

西九月

小島由右衛門  
大林兼右衛門  
末次佐吉

右書面御供組頭佐藤定蔵江佐吉相渡夫々為申渡候事

駿河守殿

御作事方江御断

覚

村上監物  
小菅猪右衛門

御玄関前 御多門

一、窓障子

三本

一、水遣所

壺ヶ所

右者西丸 御産御用ニ付御中間・御小人増泊仕候詰所江出来候様仕度奉存候、御作事方江御断被仰渡可被下候、以上

西十月

御中間頭  
御小人頭

右三通

駿河守殿

御賄頭江御断

覚

村上監物  
小菅猪右衛門

一、手桶

壺ツ

一、搔器

壺本

右者西丸 御産為御用御中間・御小人増泊仕候ニ付、先達而手桶式ツ請取候処人数多ニ而引足り不申候間、書面之通増受取仕度奉存候、尤御用濟候ハ、返納可仕候、此段御賄頭江御断被仰渡可被下候、以上

西十月

御中間頭  
御小人頭

右三通ツ、掛り御徒目付上村吉兵衛江由右衛門当番十月二日ニ差遣候事

(朱書)  
「拾壹」

於西丸 若君様 御誕生被為 在候ハ、御七夜之節 御目見以上以下西丸当番詰番并詰合之分末々輕キ者迄御祝之餅・御酒被下候ニ付、其心得ニ而人数書相調可差出候、尤其節 公方様西丸江被為 成候得者右御供之分江も被下候間、其心得ニ而是又人数書可差出事

但 御目見以下上下役以上迄者於蘇鉄之間頂戴之積、其外輕キ者之儀ハ頭支配より御賄方江申談請取候筈ニ付、当日猶又人数書差出請取頂戴致候様可心得事

以上

十月

村上監物  
小菅猪右衛門  
三宅市右衛門  
本多作左衛門

右十月八日当番所より相廻五役承附相返候旨由右衛門より申来、御供組頭江申渡人数書為差出候上左之書面差出

覚

御七夜御祝儀之節	
西丸詰合人数	壹人
御中間頭	壹人
御小人頭	壹人
御中間御供組頭	壹人
同断当番人数	三人
御使組頭	三人
御中間目付	三拾九人
御小人目付	貳拾七人
御中間	八拾貳人
御小人	

(朱書)  
「拾貳」

右之通御座候、以上  
西十月

公方様西丸江被為  
成候得者御供人数

御中間目付 五人  
御小人目付 三人  
御中間 拾三人  
御小人 五拾人

西丸御中間当番人数記置内訳左之通

御長屋御門	四人
内世話役	壹人
加番	壹人
御納戸口	壹人
御台所口前	壹人
奥表仕切	壹人
御広敷御門	壹人
表締戸	貳人宛
御持鑓	七人
内三人者	七人
若君様御供扣	四人
野方御使	四人
昼番御用方	貳人
公方様西丸江被為	貳拾七人
成候節御供人数内訳左之通	
御持鑓	



野方 八人

五人

拾三人

御中間頭  
御小人頭

於西丸 御産之節若夜中急 御成、其外為御用当月朔日より御  
小人目付・御小道具・御使之者等増泊致候処、今日より不及其  
儀候

一、右ニ付御玄関前・御納戸・御多門之内請取相詰候処、御用相濟  
候ニ付御作事方江引渡候様可被致候

十月晦日

村上監物  
小菅猪右衛門

御中間頭  
御小人頭

御使之者 七人

右者 御誕生御用ニ付当月朔日より昼夜詰切泊り候様申渡候  
処、今日より昼夜詰切泊り候ニ不及候事

十月晦日

三宅市右衛門  
本多作左衛門

御中間頭  
御小人頭

御使之者 五人

右者 御産御用ニ付当月十二日より昼夜詰切泊致候様猶又申

渡候処、今晦日より昼夜詰切増泊ニ不及候事

十月晦日

三宅市右衛門  
本多作左衛門

右三通兩丸当番所より差越、承付返ス

駿河守殿

臨時御台所江御断返

覚

村上監物  
小菅猪右衛門

右者於西丸 御産之節右御用并急 御成御供之者共書面之通増  
詰切仕候ニ付、朝夕御夜食共御台所被下候様先達而御断申上置候  
処、昨晦日迄ニ而御用相濟候ニ付御断返仕候、此段御賄方江被仰  
渡可被下候、以上

西十一月朔日

御中間頭  
御小人頭

右三通

駿河守殿

臨時

御勘定所江御断返

覚

村上監物  
小菅猪右衛門

十五日分  
一、油合三升三合七勺五才

但壺ケ所壺夜ニ付  
七勺五才宛、灯心共  
三ケ所分

右者於西丸 御産之節右御用并急 御成御供御中間・御小人増詰  
切仕候部屋々々江灯候間、先達而御断申上当月朔日より十五日

分宛受取候処、昨晦日迄<sup>二</sup>而御用相濟候<sup>二</sup>付御断返仕候、此段御勘定所江被仰渡可被下候、以上

西十一月朔日

御中間頭  
御小人頭

右三通

〔御作事奉行衆〕

村上監物  
小菅猪右衛門

覚

御中間 合 四拾四人  
御小人

右者於西丸 御産之節右御用并急 御成御供之者共増詰切仕候  
二付御玄関前御多門之内ニ差置候間、疊三拾疊并仕切等之儀先達而申上出来仕候処、右御用相濟候ニ付此段御作事方江御達可被下候、以上

西十一月

御中間頭  
御小人頭

〔御賄頭中〕

村上監物  
小菅猪右衛門

覚

一、手桶

三ツ

但割蓋共

一、搔器

三ツ

一、棕欄箒

壺本

右者於西丸 御産之節右御用并急 御成御供御中間・御小人増詰切仕候部屋々々江先達而両度ニ受取置候処、右御用相濟候ニ付返納可仕候、此段御賄方江御達可被下候、以上

西十一月

御中間頭  
御小人頭

御細工頭中

村上監物  
小菅猪右衛門

一、鉄行灯

三ツ

但網懸小道具共

右同断

右式通宛

〔駿河守殿〕

〔壹岐守殿〕

西丸御用

御台所江御断返

覚

御小人目付 五人

式拾老人之内

御中間 合 七人

御小人 合 七人

同断 合 五人

右者 御産御用ニ付増詰切仕候間、朝夕御湯漬共御台所被下候様先達而両度ニ御断申上候人数之内、書面之通昨晦日迄<sup>二</sup>而御用相濟候間御断返仕候、此段御賄方江被仰渡可被下候、以上

西十一月朔日

御中間頭  
御小人頭

右四通十一月朔日 御本丸・西丸共夫々懸り御徒目付江遣又

御中間頭江  
御小人頭

御使之者

拾四人

右者 御誕生御用ニ付十月朔日より昼夜詰切泊候様申渡候処、御用相濟候ニ付今二日より昼夜詰切泊候ニ不及候事

十一月二日

三宅市右衛門  
本多作左衛門

駿河守殿

壹岐守殿

西丸御用

御台所江御断返

三宅市右衛門  
本多作左衛門

覚

式拾老人之内

御中間 合 拾四人  
御小人

右者 御産御用ニ付増詰切仕候間、朝夕御湯漬共御台所被下候様先達而御断申上候内、七人者去月晦日迄ニ而御用相濟候間其節御断申上候、残る拾四人昨二日迄ニ而御用相濟候間御断返仕候、此段御賄方江被仰渡可被下候、以上

西十一月三日

御中間頭  
御小人頭

駿河守殿

壹岐守殿

西丸御用

御勘定所江御断返

三宅市右衛門  
本多作左衛門

覚

十五日分

一、油合三升三合七勺五才

但一夜ニ付壹ヶ所

七勺五才宛、灯心共  
三ヶ所分

右者 御産御用ニ付御小人目付・御中間・御小人増詰切仕候間、

右部屋々々江灯候ニ付先達而御断申上、当十月朔日より十五日分宛受取候処、昨二日迄ニ而御用相濟候ニ付御断返仕候、此段御勘定所江被仰渡可被下候、以上

西十一月三日

御中間頭  
御小人頭

右両様四通宛十一月三日西丸懸り御徒目付上野勘兵衛江遣

御細工頭中

覚

一、鉄行灯

但網掛小道具共

三ツ

右者 御産御用ニ付御小人目付・御中間・御小人増詰切仕候部屋々々江先達而受取候処、御用相濟候ニ付返納可仕候、此段御細工所江御達可被下候、以上

西十一月

御中間頭  
御小人頭

右式通前同断

駿河守殿

壹岐守殿

西丸御用

御台所御断

三宅市右衛門  
本多作左衛門

覚

御中間 合 式拾五人  
御小人

右者 若君様為御供扣罷出候間、日々朝夕御台所御夜食共被下候様御賄方江被仰渡可被下候、以上

西十一月

御中間頭

御小人頭

右御扣共四通十一月三日西丸御徒目付上野勘兵衛江遣又、尤御中間方者御持鑓三人・野方御使三人而已而其余者御小人方也

(朱書)

〔拾参〕

十一月三日御達承付返上

若君様 御誕生ニ付当月十日前後之内紅葉山 御宮惣 御靈屋江公方様 供奉行列ニ而御一同被遊 御参詣候御沙汰之旨駿河守大納言様 殿被仰渡候、依之申達候事  
十一月

村上監物  
小菅猪右衛門

〔駿河守殿〕

臨時  
御細工所江御断  
覚

村上監物  
小菅猪右衛門

一、茶縮緬袷羽織 壹ツ  
但紐共

御中間御供組頭  
壹人

一、黒加賀絹袷羽織 拾六

御中間目付  
拾壹人  
御中間押  
五人

一、黒絹単羽織 九ツ

御中間  
九人

右者近々紅葉山 御宮惣 御靈屋江 御参詣之節着候ニ付書面之通為請取申度奉願候、御細工所江御断被仰渡可被下候、以上  
御中間頭

西十一月

小島由右衛門  
大林糸右衛門  
末次佐吉

〔駿河守殿〕

臨時  
御納戸江御断  
覚

村上監物  
小菅猪右衛門

一、熨斗目小袖 七ツ  
但綿代金壹ツニ付壹両式朱宛之積

御先練御中間  
七人

一、綾島小袖 壹ツ  
但綿代金壹両式朱之積り

御中間御供組頭  
壹人

右者近々紅葉山 御宮惣 御靈屋江 御参詣之節着候ニ付、書面之通為請取申度奉願候、御納戸江御断被仰渡可被下候、以上

西十一月

御中間頭  
小島由右衛門  
大林糸右衛門  
末次佐吉

〔駿河守殿〕  
〔壹岐守殿〕

西丸御用

臨時  
御細工所江御断  
覚

三宅市右衛門  
本多作左衛門

一、茶縮緬袷羽織 壹ツ  
但紐共

御中間御供組頭  
壹人  
御中間目付  
拾壹人

一、黒加賀絹袷羽織 拾六

御中間押 五人

一、黒絹単羽織 拾

御中間 拾人

右者近々 大納言様紅葉山 御宮惣 御靈屋江 御参詣之節

着候ニ付、書面之通為受取申度奉願候、御細工所江御断被仰渡可被下候、以上

西十一月

御中間頭

小島由右衛門  
大林糸右衛門  
末次佐吉

駿河守殿

老岐守殿

西丸御用

臨時

西丸御納戸江御断

覚

御先練御中間

七人

一、熨斗目小袖 七ツ

但綿代老ツニ付金老両式朱宛之積

一、綾島小袖 老ツ

但綿代金老両式朱之積

御中間御供組頭

老一人

右者近々 大納言様紅葉山 御宮惣 御靈屋江 御参詣之節

着候ニ付、書面之通為請取申度奉願候、御納戸江御断被仰渡可被下候、以上

西十一月

御中間頭

小島由右衛門  
大林糸右衛門  
末次佐吉

右都合拾四通十一月五日猪右衛門殿江差出、西丸者作左衛門殿江差出候事

(朱書)

「十四」

西十一月十四日西丸当番所より差越承附返ス

御中間頭江

御小人頭

出火之節 竹千代様御供心得方取調早々可被差出事  
十一月 村上監物  
小菅猪右衛門  
三宅市右衛門  
本多作左衛門

十一月廿四日御産掛西丸御徒目付中村専助江遣ス、十二月晦日此通り可心得旨被仰渡有之

出火之節

竹千代様御供之覚

一、御中間頭之内 老一人

御小人頭

但御中間頭・御小人頭老一人宛御供可仕筈ニ御座候得共

公方様

大納言様 御供も相心得罷在候間、左候而者六人共出払ニ相成

御城内御用之方差支申候間書面之通老一人御供仕候心得ニ

御座候

一、御小人目付 四人

一、御小人押 四人

一、御草履取 式人

一、御長刀壹振	御長刀役	三人
一、御鎗五筋	御持鍵之者	拾人
一、御馬四疋	御中間	拾式人
一、御鉄炮五挺	御小人	拾人
一、御貝挾箱壹ツ	同	四人
一、御挾箱四走り	同	拾六人
一、御台傘壹本	同	式人
一、御日傘壹本	同	式人
一、御雨傘壹本	同	式人
一、御曲録壹脚	同	式人
一、御牀机壹脚	同	式人
一、御手傘壹本	同	式人
一、御蓑箱壹ツ	同	四人
一、御日覆壹ツ	同	四人
一、御雨覆壹ツ	同	四人
一、御挑灯拾八張	同	式拾人
一、高丸御挑灯六張	同	拾式人

右者 出火之節御供 大納言様御供ニ准書面之通相心得候様可  
仕奉存候、依之申上候、以上

御中間頭

(朱書)  
「拾五」

御産御用ニ付増泊仕候者共江  
御手当奉願候書付  
覚  
村上監物  
小菅猪右衛門

御中間目付 合 七人  
御小人目付 合 拾五人  
御成御用 御小人 拾六人  
御挑灯持 御小人 拾人  
右被仰渡候人数ニ而者 御成御用  
用事足り不申候ニ付外ニ増泊

御使組頭 壹人  
御小人 八人  
都合五拾式人宛隔日泊之積  
人数百四人  
黒鉄之者 五拾七人  
右隔日泊之積人数百拾四人

右者此度於西丸 御産之節御用并急 御成為御供増詰切被仰渡候ニ付、十月朔日より同廿九日迄定式勤番之外書面之通一昼夜詰切交代相勤申候、然ル処右役々之儀者平日通も繁勤ニ御座候上増勤仕候ニ付、隔日又者居越泊等も仕手足不申候処、格別之御用筋一同励合泊明ケより定式勤仕、又者諸出役より打返右御用之方江相詰、或者兼合相勤隔日泊之割合ニ者候得共日勤仕誠ニ骨折、殊ニ御先例よりハ詰切人数も相増平生泊方不仕役々迄罷出、乍少分も諸失墜も相掛候義ニも御座候間、可相成儀ニ御座候ハ、相応之御手当被下置候様仕度奉願候、左候得者小給之者共取続ニも

罷成一同相勵於私共難有仕合奉存候、尤人数多<sup>ニ</sup>も御座候間一  
統江相当之御手当被下置候得者、銘々勤日数を以割合頂戴為仕度  
奉存候、依之奉願候候、以上

西閏十一月

黒鋏頭  
御中間頭  
御小人頭

右御扣共式通閏十一月六日御掛り猪右衛門殿江出ス、同十二月二  
日不被及御沙汰旨駿河守殿被仰渡候段、監物殿懸り御徒目付を以  
被仰聞候事

御産御用ニ付増泊仕候者共江

御手当奉願候書付

覚

三宅市右衛門  
<sup>多</sup>本田作左衛門

御中間目付合 三人  
御小人目付 拾老人

御中間 拾五人  
御小人 拾五人

都合式拾九人宛隔日泊之積  
人数五拾八人

黒鋏之者 四拾五人  
右隔日泊之積人数九拾人

右者此度 御産御用ニ付増詰切被仰渡候間、十月朔日より同廿九  
日迄定式勤番之外一昼夜詰切交代相勤申候

(末文言 御本丸同様ニ付留略ス)

右御扣共三通閏十一月六日作左衛門殿江差出、十二月三日御沙汰  
不被及旨壱岐守殿被仰渡候段、作左衛門殿被仰渡候事

(朱書)

「拾六」

酉十二月晦日西丸当番所より差越承付返上

黒鋏頭  
御中間頭江  
御小人頭

先達而差出候出火之節 竹千代様御供心得方書面之通壱岐守  
殿江相伺候処、伺之通被仰渡候間此段可相心得事  
十二月

村上監物  
小菅猪右衛門  
三宅市右衛門  
本多作左衛門

(朱書)

「拾七」

子九月廿四日但馬守殿より被遣、致承付翌廿五日返上

若君様 御城内 御成御供伺下書

若君様 御城内 御成御供之儀奉伺候書付

駒井但馬守

一、御目付 壱人

右西丸御目付相心得罷在候、若病氣差合等<sup>ニ</sup>而御人少<sup>ニ</sup>相成候

節ハ 御本丸御目付より助合相勤候心得<sup>ニ</sup>罷在候

一、西丸新御番 頭 之内<sup>ニ</sup>而壱人 御番衆六人

右者 右大将様 御城内 御成之節、平日当番之御小性組よ  
り与頭壱人・同御番衆六人御供仕候間、此度 若君様被遊 御

誕生候日より 御城内 御成御供之義元文度御振合ヲ以、前書  
之通新御番方<sup>ニ</sup>而相心得候様可申談候哉

一、西丸小十人組 組頭壱人  
御番衆三人

右ハ 右大将様 御城内 御成之節御供相心得罷在候間、此

度 若君様被遊 御誕生候日より同様御供相心得 御二方  
様 御一所ニ而被為 成候節、御供之組頭若差懸り病氣・痛所等  
之節ハ組頭呼上之御間ニ合不申節ハ、頭御供仕呼上之組頭出勤  
次第代り合、且又頭組合俄病氣・痛所等有之候節ハ筆頭之御番  
衆三人御供仕候様可申談候哉

一、西丸御徒目付 式 人

右平生六人泊ニ御座候

右大将様 御成御供右人数之内より式人罷出候

若君様被遊 御誕生候ハ、御同様非番より御供為仕差掛 御成  
被 仰出候節ハ非番之者呼上申遣、呼上之者御間ニ合兼候ハ、  
右勤番人数之内より御供仕呼上之者罷出次第代り合御供罷出候  
様可為仕候

一、御中間頭之内 壹 人

御小人頭 之内 壹 人  
右日々御中間頭壹人・御小人頭壹人相詰罷在

公方様

右大将様 御一同 御成被 仰出候得ハ御中間頭・御小人頭不

残御供仕候

若君様被遊 御誕生候ハ、西丸御使組頭御供相心得候様可為  
仕候、尤夜中者御中間頭・御小人頭共御供不仕候

一、西丸御駕籠頭 壹 人

右日々壹人宛相詰 右大将様御供相心得罷在候

若君様被遊 御誕生候ハ、非番之御駕籠頭御供相心得罷在、且  
差懸り 御成被 仰出候節ハ御駕籠之者組頭御供仕候様可為  
仕候

一、御馬 壹 正

一、御馬乗 壹 人

一、御口之者 式 人

右ハ蓮池御厩ニ増泊仕候様可申談候哉

一、御数寄屋坊主 壹 人

右ハ 右大将様御供之振合を以 若君様被遊 御誕生候

ハ、右之通相心得候様可申談候哉

一、西丸御小人目付 三 人

右ハ平生八人泊ニ御坐候

右大将様 御成御供之儀ハ泊り明ケより式人相心得、当番より  
壹人相心得罷在候

若君様被遊 御誕生候ハ、是又御同様式人者泊り明より御供  
仕、壹人者当番より御供之方江罷出候様可為仕候

一、御草履取 壹 人

一、御持鏝之者 三 人

一、御長刀役 壹 人

一、御小道具役 九 人

一、御使之者 五 人

一、御駕籠之者 拾 人

右者 右大将様御供之振合を以 若君様被遊 御誕生候  
ハ、書面之通増泊可為仕候

一、御露地之者 式 人

右ハ 右大将様御供之振合を以 若君様被遊 御誕生候  
ハ、右之通相心得候様可申談哉、右ハ 若君様被遊 御誕生



生候日より 御城内 御成御供書面之通相心得候様向々江可申  
談候哉、且火事・急事之節御供之義ハ追而被仰渡御座候迄ハ書  
面之通相心得可罷在候哉

并前々 御誕生之節之御振合を以本文之通申上候  
右之趣奉伺候、以上

九月

駒井但馬守

(朱書)

「拾八」

御中間頭  
御小人頭江

御使之者

拾弐人

御留守居断

同

拾四人

西丸御広敷御用人断

同

弐人

右ハ 御誕生御用ニ付来月朔日より昼夜詰切泊候様可被申渡事

九月

駒井但馬守

(朱書)

「拾九」

御中間頭  
御小人頭江

御産御用ニ付取扱相勤候御小人目付并当番御小人目付昼夜増泊  
詰切候ニ付、只今迄之部屋手狭ニ付御玄関前腰懸・二階御持鐘之  
者部屋、右御用中増泊御小人目付仮部屋ニいたし、御持鐘之者  
ハ御長刀役之部屋へ打込罷在候様可申渡事

九月

駒井但馬守

(朱書)

「弐拾」

駿河守殿

諸左衛門殿

於西丸 御簾中様 御安産之当日 御本丸平服、西丸服紗小袖  
麻上下

一、惣出仕并御七夜之節 御本丸・西丸熨斗目半袴

右之通向々江可被達候

九月

(朱書)

「弐拾壹」

左兵衛佐殿

撰津守殿

西丸御用

御台所江御断

覚

駒井但馬守

御小人目付 五人

御中間 合 三十人

右者 御産御用ニ付増詰切仕候間、十月朔日より御用相濟候迄朝

夕御夜食共御台所引支度被下候様御賄方江御断被仰渡可被下候、

已上

子九月

御中間頭  
御小人頭

左兵衛佐殿

撰津守殿

西丸御用

臨時  
御細工所江御断  
覚

駒井但馬守

一、鉄行灯  
但網掛小道具共  
三ツ

右者 御産御用ニ付御小人目付・御中間・御小人増詰切仕候間右  
部屋々々江請取申度奉存候、御用相濟候ハ、返納可仕候、以上  
子九月

御中間頭  
御小人頭

左兵衛左殿  
攝津守殿

西丸御用  
臨時  
御勘定所江御断  
覚

駒井但馬守

十五日分  
一、油合三升三合七勺五才  
但老ケ所一夜ニ付  
七勺五才宛、灯心共  
三ヶ所分

右者 御産御用ニ付御小人目付・御中間・御小人増詰切仕候間右  
部屋々々江灯候ニ付、十月朔日より十五日分御用相濟候迄書面之  
通受取申度奉存候、以上  
子九月

御中間頭  
御小人頭

(朱書)  
「貳拾貳」  
御産御催之節為御知

御使之者御小人  
貳人

右之通先達而御達申置候処、御篋刀御掛駿河守殿 御本丸御月番  
若年寄衆江も為御知申上候様、猶又伺相濟候間貳人相増都合四人  
来月朔日より不限昼夜御手当有之候様兼而御申渡置有之候様、此  
段及御懸合候、以上

九月  
駒井但馬守殿

荻原金十郎

(朱書)  
「貳拾三」

於西丸 御産之節、不限昼夜西丸 御成其外為御用御徒目付・  
御小人目付・御小道具・御使之者等御差支無之様、十月朔日よ  
り増泊為致可申事  
九月

牧 助右衛門  
間宮諸左衛門

(朱書)  
「廿四」

於西丸 御安産御当日、御月番御退出已前御催之御沙汰有之候  
ハ、詰番之面々退出不致相待罷在候事

一、御退出後 御誕生ニ候得ハ、御登 城有之候故及晚景候ニ付詰番  
并平日中之間江相詰候面々罷出ニ不及候事  
但 御誕生 御用懸り之者并取扱之者者前々之振合ニ可相心  
得事

一、御誕生御当日 御本丸・二丸ハ平服、西丸ハ服紗小袖麻上下着  
用之事

右之趣伺相濟候ニ付相達候事  
九月

井上美濃守

(朱書)

「廿五」

於西丸 御産之節急 御成被 仰出候儀も可有之候間、其節当  
番・詰番等御目見罷出候面々并組支配共 御本丸 殿中着服之  
通平服二而可罷出候

一、西丸向者 御成相濟候已後服紗小袖麻上下着替 御目見可罷  
出候、御誕生被 仰出候已後 御成有之候ハ、服紗小袖麻上下  
二而可罷出候

右之趣向々江相達置候間、支配向御供并出役罷出候者共衣服等之儀  
右之振合ニ相心得候様兼而可申渡置候事

九月

牧 助右衛門  
間宮諸左衛門  
駒井但馬守

牧 助右衛門  
間宮諸左衛門

(朱書)

「廿六」

西丸御徒目付組頭  
御中間頭  
御小人頭  
西丸御駕籠頭  
江

御徒目付  
御中間頭  
御小人頭  
御駕籠頭  
御小人目付  
御小人組頭  
御草履取  
御持鏝役  
御長刀役

(朱書)

「廿七」

右ハ此度 若君様被遊 御誕生候節、右之分 御城内 御成  
御供割都而 右大將様御行列之通相心得可申旨、左兵衛佐殿被  
仰渡候間 御誕生被遊候日より日々当置可申候、依之申達候事  
十月 駒井但馬守

撰津守殿御渡  
今未上刻 御簾中様 御安産 姫君様被遊 御誕生候、此段  
向々江可被達候  
十月廿三日

(朱書)

「廿八」

於西丸 御産之節、夜中急 御成其外為御用当月朔日より御徒  
目付・御小人目付・御小道具・御使之者等増泊為致候処、今日  
より不及其儀候

一、右ニ付御玄関前御多門之内請取相詰候処、御用相濟候ニ付御作事  
方へ引渡候様可致候

右之趣申渡候事

十月廿三日

牧 助右衛門  
間宮諸左衛門

(朱書)

「廿九」

〔駿河守殿〕

臨時

御台所へ御断

覚

牧 助右衛門  
間宮 諸左衛門

御小人目付

七人

御中間 合 四拾四人  
御小人

右ハ於西丸 御産之節 御成御供其外為御用書面之通増詰切仕  
候ニ付、十月朔日より御用相濟候迄朝夕御夜食共、御台所引支  
度被下候様御断可被下候、以上

子九月

御中間頭  
御小人頭

御作事方江御断

覚

牧 助右衛門  
間宮 諸左衛門

御中間 合 四拾四人  
御小人

一、疊

三拾疊

一、窓障子

五本

一、水遣所

壺ヶ所

右者於西丸 御産之節 御成御供其外為御用書面之通増詰切仕  
候ニ付、御玄関前御多門之内へ差置候処奉存候間、疊鋪入仕切  
等出来仕候様仕度奉存候、以上

子九月

御中間頭  
御小人頭

臨時

御賄方江御断

牧 助右衛門  
間宮 諸左衛門

覚

一、手桶

五ツ

但割蓋共

一、搔器

五本

一、しゆろ箒

壺本

右ハ於西丸 御産之節 御成御供其外為御用御中間・御小人増  
泊切仕候ニ付、右部屋々々江受取申度奉存候間、御用相濟候ハ、  
返納可仕候、以上

子九月

御中間頭  
御小人頭

臨時

御細工所江御断

覚

牧 助右衛門  
間宮 諸左衛門

一、鉄行灯

三ツ

但網掛小道具共

右ハ於西丸 御産之節 御成御供其外為御用御中間・御小人増  
詰切仕候ニ付、右部屋々々江請取申度奉存候、御用相濟候ハ、返  
納可仕候、已上

子九月

御中間頭  
御小人頭

臨時

御勘定所江御断

覚

牧 助右衛門  
間宮 諸左衛門

十五日分

一、油合三升三合七勺五才

但壺ヶ所一夜ニ付  
七勺五才ツ、灯心共  
三ヶ所分

右者於西丸 御産之節 御成御供其外為御用御中間・御小人増

詰切仕候ニ付、右部屋々々江灯候間十月朔日より十五日分御用相  
濟候迄書面之通請取申度奉存候、已上

子九月

御中間頭  
御小人頭

左兵衛佐殿

駿河守殿

西丸御用

御台所江御断

駒井但馬守

覚

御小人目付 五人

御中間 合 三拾人  
御小人

右ハ 御産御用ニ付、増詰切仕候ニ付十月朔日より御用相濟候迄、  
朝夕御夜食共御台所引支度被下候様、御賄方へ御断被仰渡可被  
下候、已上

子九月

御中間頭  
御小人頭

西丸御用

臨時

御細工所江御断

駒井但馬守

覚

一、鉄行灯

但網掛小道具共

三ツ

右ハ 御産御用ニ付御小人目付・御中間・御小人増詰切仕候間、  
右部屋々々江請取申度奉存候、御用相濟候ハ、返納可仕候、以  
上

子九月

御中間頭

御小人頭

西丸御用

臨時

御勘定所江御断

覚

駒井但馬守

十五日分

一、油合三升三合七勺五才

但壺ケ所一夜ニ付

七勺五才ツ、灯心共

三ヶ所分

右ハ 御産御用ニ付御小人目付・御中間・御小人増詰切仕候間、  
右部屋々々江十月朔日より十五日分御用相濟候迄、書面之通受  
取申度奉存候、以上

子九月

御中間頭  
御小人頭

(朱書)

「三拾」

駿河守殿

臨時

御台所江御断返

覚

牧 助右衛門  
間宮諸左衛門

御小人目付 七人

御中間 合 四拾四人  
御小人

右ハ於西丸 御産之節 御成御供其外為御用書面之通増詰切仕  
候間、朝夕御夜食共御台所被下候様先達而御断申上候処、昨廿  
三日迄ニ而御用相濟候間御断返し仕候、此段御賄方へ被仰渡可被  
下候、以上

子十月

御中間頭  
御小人頭

臨時  
御勘定所江御断返

牧 助右衛門  
間宮 諸左衛門

十五日分  
一、油合三升三合七勺五才

但老ヶ所一夜ニ付  
七勺五才ツ、灯心共  
三ヶ所分

右ハ於西丸 御産之節 御成御供其外為御用御中間・御小人増  
詰切仕候ニ付、部屋々々江灯候間、先達而御断申上当十月朔日よ  
り十五日分ツ、請取候処、昨廿三日迄ニ而御用相濟候間御断返仕  
候、此段御勘定所江被仰渡可被下候、以上

子十月

御中間頭  
御小人頭

「御作事奉行衆

一、疊

三拾疊

御中間 合 四拾四人  
御小人

一、窓障子

五本

一、水遣所

壺ヶ所

右ハ於西丸 御産之節 御成御供其外為御用書面之通増詰切仕  
候ニ付、御玄關前御多門之内差置候間、疊敷入并仕切等之儀先達  
而申上出来仕候処、右御用相濟候ニ付、此段御作事方へ御談可被  
下候、已上

子十月

御中間頭  
御小人頭

「御賄頭中

覚

牧 助右衛門  
間宮 諸左衛門

一、手桶

五ツ

一、搔器  
但割蓋共

五本

一、しゆる箒

壺本

右ハ於西丸 御産之節 御成御供其外為御用御中間・御小人増  
詰切仕候部屋々々江受取候処、右御用相濟候ニ付返納可仕候、此  
段御賄方へ御達可被下候、已上

子十月

御中間頭  
御小人頭

(朱書)

「本之儘御細工所敷」

御賄頭中

覚

牧 助右衛門  
間宮 諸左衛門

一、鉄行灯

三ツ

但網掛小道具共

右ハ於西丸 御産之節 御成御供其外為御用御中間・御小人増  
詰切仕候部屋々々江先達而請取候処、右御用相濟候ニ付返納可仕  
候、此段御細工所江御達可被下候、已上

子九月

御中間頭  
御小人頭

「左兵衛佐殿

「撰津守殿

西丸御用

臨時

御台所へ御断返

覚

駒井但馬守

御小人目付 五人  
御中間 合 三拾人  
御小人

右者 御産御用ニ付増詰切仕候間、朝夕御夜食共御台所被下候様  
先達而御断申上候処、昨廿三日迄ニ而御用相濟候間御断返仕候、  
此段御賄方江被仰渡可被下候、以上

子十月

御中間頭  
御小人頭

西丸御用

臨時

御勘定所江御断

駒井但馬守

覚

一、油合三升三合七勺五才

但壺ヶ所一夜ニ付

七勺五才ツ、灯心共

三ヶ所分

右者 御産御用ニ付御小人目付・御中間・御小人増詰切仕候間  
右部屋々々江灯候ニ付、先達而御断申上当十月朔日より十五日  
分ツ、受取候処、昨廿三日迄ニ而御用相濟候ニ付御断返仕候、此  
段御勘定所江被仰渡可被下候、以上

子十月

御中間頭  
御小人頭

御細工所頭中

駒井但馬守

覚

一、鉄行灯

但網掛小道具共

三ツ

右者 御産御用ニ付御小人目付・御中間・御小人増詰切仕候ニ  
付部屋々々江先達而受取候処、御用相濟候ニ付返納可仕候、此  
段御細工所頭江御達可被下候、以上

子十月

御中間頭  
御小人頭

(朱書)  
「三拾壹」  
亥正月九日御達

西丸御徒目付組頭  
御中間頭  
御小人頭  
西丸御駕籠頭  
江

右者此度 若君様 御誕生被遊候節右之分 御城内御供割都  
而 大納言様御行列之通相心得可申渡旨近江守殿被仰渡候間、  
御誕生被遊候日より日々当置可被申候、依之申達候事

正月

彦坂三太夫  
牧 助右衛門  
筒井佐次右衛門  
須田与左衛門

(朱書)  
「三拾貳」

御産御用ニ付取扱相勤候御小人目付并当番御小人目付昼夜増泊  
御中間頭  
御小人頭  
江

り詰切候ニ付、唯今迄之部屋手狭ニ付御玄関前腰掛・二階御持鑓  
之者部屋、右御用中増泊御小人目付仮部屋ニいたし御持鑓之者者  
御長刀役之部屋江打込罷在候様可申渡事

正月

須田与左衛門  
筒井佐次右衛門

(朱書)

「参拾三」

御中間頭  
御小人頭  
江

御使之者

拾式人

同

拾四人

右者 御誕生御用ニ付来月朔日より昼夜詰切泊り候様可申渡事  
正月

須田与左衛門  
筒井佐次右衛門

(朱書)

「五百四十六」

「三拾四」

西丸御徒目付組頭  
御中間頭  
御小人頭  
西丸御駕籠頭

御徒目付  
御中間頭  
御小人頭  
御駕籠頭  
御小人目付  
御小人組頭  
御草履取  
御持鎗役

御長刀役  
御小道具役  
御使之者  
御駕籠之者

右者此度 嘉千代様 御弘被 仰出候ハ、右之分 御城内

御成御供割都而 右大将様御行列之通相心得可申旨、尤火事・

急事之節御供之儀も追而被仰渡候迄ハ、右人数ニ而相心得候様

玄蕃守殿被仰渡候間 御弘被 仰出候日より日々当置可申候、

依之申渡候事

九月

成瀬吉右衛門

此度 嘉千代様御弘被 仰出日より、御中間・御小人勤番并 御

城内 御成之節御供人数左ニ申上候

一、御中間頭 之内 壹 人

右者一役壹人宛相詰罷在候間

公方様 御一同 御成被 仰出候節者 嘉千代様御供西丸

右大将様 御一同 御成被 仰出候節者 嘉千代様御供西丸

嘉千代様 御使組頭為相勤可申候

一、御小人目付 三 人

一、御草履取 壹 人

一、御持鎗之者 三 人

一、御長刀役 壹 人

一、御小道具之者 九 人

一、御使之者 五 人

右者御先例 若君様御供御中間・御小人人数書面之通御座候、



然ル処当時御余慶之御人無之候間 嘉千代様御人被 仰付候迄  
者差掛り候儀者西丸勤役々之者并 御本丸勤之者も差加へ相心  
得させ候様可仕候、依之申上候、已上

卯九月

御中間頭  
御小人頭

(朱書)

「三拾六」

御中間頭  
御小人頭

出火之節 嘉千代様御供之心得方取調早々可差出候事  
十月

成瀬吉右衛門  
(左金吾力)  
松平美濃守

(朱書)

「三十五」

玄蕃守殿

近江守殿

西丸御用

御台所江御断 御扣

覚

成瀬吉右衛門  
松平左金吾

右者 嘉千代様為御供扣罷出候間、日々朝夕御台所・御夜食共  
被下候様御賄方江御断被仰渡可被下候、已上

卯十月

御中間頭  
御小人頭

式拾五人之訳

御小人目付

御草履取

御長刀

御小道具

御使之者

御持槍

野方御使

三人

一人

一人

九人

五人

三人

三人

一、御中間頭  
御小人頭之内

一人

但御中間頭・御小人頭一人ツ、御供可仕筈ニ御座候得共

公方様 御供之儀相心得罷在候間左ニ而者六人共出払ニ相

右大将様

成 御城御用之方差支申候間、書面之通一人御供仕候心  
得ニ御座候

一、御小人目付

四人

一、御小人押

四人

一、御草履取

三人

一、御長刀一振

御長刀役  
三人

一、御鎗五筋

御持鎗之者  
拾人

一、御馬四疋

御中間  
拾式人

一、御鉄炮五挺

御小人  
拾人

一、御貝挟箱一人

同

一、御挟箱四人

同

一、御挟箱四走

同  
拾六人

一、御台傘壹本

同 式人

一、御日傘壹本

同 式人

一、御雨傘壹本

同 式人

一、御曲録壹脚

同 式人

一、御牀机壹脚

同 式人

一、御手傘壹本

同 式人

一、御蓑箱壹ツ

同 四人

一、御日覆壹ツ

同 四人

一、御雨覆壹ツ

同 四人

一、御挑灯拾八帳(マ)

同 式拾人

一、高張御挑灯六帳

同 拾式人

右者出火之節御供 右大将様御供ニ准し書面之通相心得候之様  
可仕奉存候、依之申上候、以上

卯十月

御中間頭  
御小人頭

(朱書)

〔三拾七〕

〔近江守殿

臨時

御細工所江御断

覚

一、茶縮緬袷羽織 壹ツ

御中間御供組頭  
壹人

内藤隼人正  
羽太左京

但紐共

御中間目付

一、黒加賀袷羽織

拾六

御中間押

五人

一、黒絹単羽織

式拾

御中間

式拾人

右者来ル十七日紅葉山 御宮 惣御靈屋江 御参詣之節着候ニ  
付書面之通為請取申度奉願候、御細工所江御断被仰渡可被下候、  
以上

卯十月

御中間頭  
三名

右御扣とも三通

近江守殿

臨時

御納戸江御断

覚

内藤隼人正  
羽田左京(天)

一、綾島小袖 壹ツ

但綿代金壹両式朱之積

御中間御供組頭  
壹人

右者来ル十七日紅葉山 御宮 惣御靈屋江 御参詣之節着候ニ  
付書面之通為請取申度奉願候、御納戸江御断被仰渡可被下候、  
以上

卯十月

御中間頭  
三名

右都合六通り掛り御徒目付梶川清次郎江差出ス

玄蕃守殿

近江守殿

西丸御用

臨時

御細工所江御断

覚

一、茶縮緬袷羽織 壹ツ

但紐共

御中間御供組頭

壹人

御中間目付

拾壹人

御中間押

五人

御中間

貳拾壹人

一、黒絹単羽織 貳拾壹

右者来ル十七日 右大将様紅葉山

御宮

惣御靈屋江

御参

詣之節着候ニ付書面之通為請取申度奉願候、御細工所江御断被仰渡可被下候、已上

卯十月

御中間頭

三名

右御扣とも四通

玄蕃守殿

近江守殿

西丸御用

臨時

西丸御納戸江御断

成瀬吉右衛門

松平左金吾

覚

一、綾島小袖

壹ツ

但綿代金壹両貳朱之積

右者来ル十七日 右大将様 御宮

惣御靈屋江

御参詣之節着

候ニ付書面之通為請取申度奉願候、御納戸江御断被仰渡可被下候、以上

卯十月

御中間頭

三名

右御扣とも四通

(朱書)

〔三拾八〕

来ル十七日紅葉山 御宮 惣御靈屋江

公方様

御一同被

遊 御参詣 還御後 嘉千代様

御名代有之候御沙汰之旨、

近江守殿被仰渡候、依之申達候事

十月

内藤隼人正

羽太左京

右御達書十月十一日隼人正殿被遣ヒレ付返上

明後十七日紅葉山 御宮 惣御靈屋江

公方様

御同参

還御引続 御宮江 嘉千代様 御名代有之候旨、被仰渡候之間

其旨相心得可申事

十月十五日

内藤隼人正

羽太左京

(朱書)

〔三拾九〕

紅葉山 御宮 惣御靈屋江 公方様 御一同被遊 御參詣

候節、御供建場・開場之儀者前々 御同参之節之通 御宮

惣御靈屋共 公方様御供者御左之方江開キ (朱引)

右大将様御供者御右之方江開キ候之積り、且

又御道具等之儀も前々 御同参之節之通り建・開キ候積り近江

守殿江申上置候

右之通可心得候事

十月

内藤隼人正

羽太左京

成瀬吉右衛門

松平左金吾

(朱書)

〔四拾〕

嘉千代様 御弘御祝儀ニ付、明七日日光御門跡 御対顔其外

御目見之節 御目通被罷出候面々熨斗目長袴 殿中服之儀ハ熨

斗目半袴着用之積り何相濟申候、依之申達候事

十一月六日

内藤隼人正

羽太左京

(朱書)

〔四拾壹〕

辰三月廿一日掛り御徒目付蒔田又三郎江差出ス

西丸御用

臨時

御納戸江御断

覚

羽太左京

成瀬吉右衛門

一、麻上下

七具

御中間御供組頭  
御小人御使組頭

御草履取役

御中間御供組頭

御小人御使組頭

御草履取役

御長刀役

御持鎗役

御小道具役

御中間頭

御小人頭

一、綾島小袖 七ツ

但老ツニ付綿代金老両式朱宛之積り

一、熨斗目小袖 四拾六

但老ツニ付綿代金老両式朱ツ、之積り

右者此度増上寺江 御葬送為御用御供御先江罷在候御中間・御小

人書面之通為請取申度奉存候、此段御納戸江御断被仰渡可被下

候、以上

辰三月

御中間頭

西丸御用

臨時

御細工所江御断

覚

羽田左京

成瀬吉右衛門

一、白衣 百四拾五

御持鎗之者  
御小道具之者  
御小人

御中間目付

御小人目付

御中間押

御小人押

御玄閔番

御中間

御小人

一、黒加賀絹袷羽織 八拾五

一、黒絹単羽織 九拾弍

右者此度増上寺江 御葬送為御用御供御先江罷出候御中間・御小  
人江書面之通為請取申度奉存候、此段御細工所江御断被仰渡可被

下候、已上

辰三月

御中間頭  
御小人頭

右両通とも四通ツ、

(朱書)

〔四拾貳〕

黒鍬頭

御中間頭

御小人頭

御駕籠頭 西丸共

一、御出棺之節御供揃刻限より一時早ニ相揃候事

一、此度ハ御先番別ニ不相立候間御供方ニ而可心得候 御出棺相済引

拵之儀、拙者共より案内可申事

一、御供御先勤布衣以上熨斗目長袴、布衣以下熨斗目半袴着用、翕前

堂より御廟所江之御供衣服之儀者、直垂・狩衣・大紋・布衣・素

袍着用之事

一、御途中ニ而万一雨降出し候ハ、一役耆人も相下ケ傘受取候事

右之通伺相済候間申達候事

三月

羽太左京  
成瀬吉右衛門

(朱書)

〔四拾三〕

駿河守殿

壱岐守殿

西丸御用

御台所江御断返

月番

松平左金吾  
阿部四郎兵衛

覚

御中間  
御小人 貳拾五人

右者 嘉千代様為御供扣罷出候間、日々御台所被下置候様去卯

九月御断申上候処 御出棺相済候ニ付御断返之儀御賄方江被仰

渡可被下候、以上

辰三月

御中間頭  
御小人頭

右御扣共四通三月廿四日御月番四郎兵衛殿江差出ス

(朱書)

〔五百四十七〕

〔四拾四〕

嘉永二酉年正月 日

黒鍬之者頭

御中間頭 江

御小人頭

精姫君様来月廿一日山王江 御参詣帰御之節、西丸御広敷江

御立寄可被遊候旨被仰出候事

西正月

遠山半左衛門  
石谷鉄之丞

(朱書)

〔四拾五〕

同年二月

一、来ル廿一日 精姫君様山王江 御参詣ニ付、御供并山王御先

勤且西丸御先勤人数之儀、前々 姫君様 御参詣之節之振合

ニ相心得人数書可差出候事

二月

遠山半左衛門

(朱書)

〔四拾六〕

御徒目付組頭江

石谷鉄之丞

精姫君様山王江

御参詣之節、御先勤并御供之面々江吸物・御

酒被下 御目見以下江者御酒・御肴被下候旨被仰渡候事

二月九日

遠山半左衛門  
石谷鉄之丞

(朱書)

〔四拾八〕

西二月十七日安芸守殿御渡

右之通伺相濟候事

二月

遠山半左衛門  
石谷鉄之丞

一、殿中平伏且服穢不及御供并御先勤且御道筋江罷出候者計相改可

申候、尤山王 帰御之節者相改不及候事

(朱書)

〔四拾七〕

御中間頭江

御小人頭江

来ル廿一日山王江

精姫君様 御参詣之節

一、御城内 御通之御門々々、当番之頭平伏罷出并与力・同心見計

引下り平伏之事

一、御道筋御門之者熨斗目麻上下着用之事

一、御道筋、御広敷より御裏御門・梅林坂御門・平川口御門・竹橋

御門・吹上 上覽所前通半蔵御門外左江、三宅土佐守屋敷前脇

井伊掃部頭屋敷後通り細川豊前守屋敷前脇左江、岡野大学頭屋敷

脇前通山王表門 帰御、山王表門より岡野大学頭屋敷前脇夏目

左近将監屋敷脇前井伊掃部頭屋敷脇前右江、御堀端通外桜田御

門・坂下御門より 西丸御広敷江御立寄 帰御、御同所御裏

御門より蓮池御門通り二丸銅御門・汐見坂御門通り

一、御当日殿中服穢不及相認メ候事

(朱書)

〔四拾九〕

黒鍬之者頭江

御中間頭江

来ル廿一日 精姫君様山王江 御参詣之節御供并御先勤共

熨斗目着用いたし御供 股立・足袋相用候事

一、服穢之義御先勤・御供并御道筋江罷出候もの相改可申、山王

帰御之節より不及相改候事

御参詣御当日殿中平服且服穢不及相改候事

一、御供方并山王御先勤之面々且西丸御先勤之面々江も御賦被下候

事

一、西丸御広敷 御立寄中、御同所御先勤并御供方江御酒・御肴被

下候事

右之通伺相濟候事

(朱書)  
〔五拾〕

来ル廿一日 精姫君様山王江 御参詣之節、御広敷向之者  
御本丸・西丸江人留切中ニ而も往来致シ候に付 御城内御道  
筋之御門々々江可被相達候事

二月十八日

遠山半左衛門  
石谷鉄之丞

(朱書)

〔五拾壹〕

黒鍬之者頭  
御中間頭 江  
御小人頭

一、明後廿一日 精姫君様山王江

御参詣御供揃五半時与被 仰

出候事

二月十九日

遠山半左衛門  
石谷鉄之丞

追啓、五半時与被 仰出候得共、御供之面々六半時御広敷江相揃  
候様被仰渡候事

(朱書)

〔五拾貳〕

西三月十九日越中守殿御渡、市郎兵衛殿御達

精姫君様当十一月中有馬中務大輔方江御引移可被為在候旨被仰

出候、此段向々江可被達候

三月十九日

(朱書)

〔五拾三〕

酉十月

精姫君様来月有馬中務大輔方江御引移可被為 在旨先達而被

仰出候処、当十二月中御引移可被為 在旨被 仰出候、此段  
向々江可被相達候  
十月

(朱書)

〔五拾四〕

精姫君様御引移之節御行列ニ相立候面々着服之儀、無地熨斗目  
常之麻上下着用 御目見以下者腰明キ熨斗目ニ而も不苦候事

一、御引移之節御先・御供之分共召連候侍服紗小袖麻上下着用為仕、  
徒士之者羽織着可申事

一、御引移之節御供之面々縊股立・足袋相用候事

一、同断之節御供之面々者御当朝御供揃刻限一時早ニ相揃可申事

但表向御供之分者御表江相揃御留守居より案内次第、御供之御

目付差引いたし御広敷前御供建場江相廻り可申事

一、御留守居始其外御広敷向御供之面々供廻り之分御台所前江差置、  
表向御供之面々供廻り之義者中之口向腰掛ケ江差置可申事

一、御供惣同勢之義者御春屋脇雉子橋御門辺江差置、酒井雅楽頭屋敷  
脇通被為 入候ハ、見計操出候様仕置、御徒押・御小人押附置

差引可申事

一、御引移相濟御供之面々御住居より開キ候節、若年寄衆始其外共  
乘輿并馬上ニ而開道筋登 城可被致候事

一、御引移御行列ニ相立候布衣以上・御目見以上江者、開候節吸物・  
御酒被下置、御目見以下末々軽キ者迄も赤飯・御酒被下候、尤  
席之義者布衣以上・御広敷番之頭中之間、御目見以上者桧之間ニ

而被下、右給仕表坊主差出候

御目見以下之もの江御勘定所前廊下、末々輕キもの御台所ニ而被  
下候積候事

右之通伺相済申候、依之申達候事

十一月

遠山半左衛門

(稗朱引)

精姫君様当十一月御引移り之処、十二月中御引移可被為 在旨  
被 仰出候 有馬中務大輔

(朱書)

〔五拾五〕

酉十一月五日伊勢守殿御渡、半左衛門殿御達

精姫君様御引移并御道具被遣候日限

十一月十八日 御道具 初日

十二月四日 御引移

右之通御日限被 仰出候間得其意向々江可被達候

十一月

(朱書)

〔五拾六〕

越中守殿御渡

精姫君様御道具通候於屋敷々々上下着家来熨斗目着候格之者江  
者常之熨斗目上下着セ、外之者江者服紗小袖麻上下着セ可申事

一、对之羽織着候足輕右之通警固として出可申候、人数多少者高二  
応可為心得次第事

一、御道具通候節何れもつくはい可申事

一、往還之人留候ニ不及候

但見物之者者弘可申事

右御道具屋敷前通候面々江可被相触候

十一月五日

(朱書)

〔同断〕

一、精姫君様御引移御当日御道筋之長屋等窓蓋ニ者不及候、家来者御  
通前迄者出し置 御通之節者引入可申事

一、御道筋手桶可被出候事

一、出置候家来御道具参り候時之通、熨斗目着候格之者者常之熨斗

目、外之者ニ者服紗小袖麻上下、足輕ニ者对之羽織為着可申事

一、御引移御道筋江十五歳より上之男者不出、女者不苦候事

一、御道筋之屋敷大門者締、小門者明ケ門之外ニ御徒罷在、門之内ニ

者家来可差置事

一、窓之掛戸不仕翠簾懸可申候、内より見候分者不苦候事

右之通可被相触候

十一月

(朱書)

〔五拾七〕

西十二月朔日

黒緞之者頭  
御中間頭 江  
御小人頭

精姫君様御引移之節、御供建場・開場絵図面共別紙之通伺相済



申候、尤繪図面返却可被致候、依之申達候事  
十二月朔日  
遠山半左衛門

(朱書)

「五拾八」

(朱書)

「越中守殿御渡」

来月十一日

精姫君様初而大奥江被為 入并有馬中務大輔登 城御礼有之候

二付、殿中詰合之面々熨斗目半袴可為着用候

酉十二月

(朱書)

「五百四十八」

「五拾九」

嘉永二酉年閏四月廿六日

寿明君御方御下向之節、御行列ニ立候者并御昼休御先勤之者江

於御昼休御賄被下、且御旅館泊り御番并御先勤之者江於御旅館

御賄被下候旨伺相濟候間、人数書取調早々可差出候事

閏四月廿六日

本多隼之助

(朱書)

「六拾」

同年六月御用所掛り佐藤久左衛門より差越、承附いたし御徒押江  
相達ス

御中間頭  
御小人頭

杉野甚平組  
伊藤新之助

関口彦太夫  
高野作藏

竹中藤十郎

三浦新次郎

山口金左衛門

朝倉松五郎

外山和太夫組

小島東助

栗原清太郎

小沢喜太郎

大野平右衛門

吉沢嘉一郎

東浦鏡次郎

喜多野省吾組

松永定作

平山又一郎

右者 寿明君御方御迎為御用罷越候ニ付為支度当酉年冬御切

米只今取越候様御勘定奉行江相達置候間、先格之通可取計候事

酉六月

本多隼之助

(朱書)

「六拾壹」

本多隼之助  
戸川助次郎

御小人目付

拾五人

御小人押

三人

御使之者

五人

御駕籠之者

式拾老人

金四両ツ、  
金三両ツ、  
金四両ツ、  
金三両ツ、  
金三両ツ、

銀式枚ツ、

黒鍬之者

四拾四人

内組頭共

京都江被遣候ニ付

右之通被下候間可被申渡候

(朱書)

「六拾貳」

嘉永二酉年七月晦日

渡辺甲斐守  
大河内相模守  
本多隼之助  
戸川助次郎

寿明君御方御下向ニ付御供之面々可相心得趣

一、御供之面々作法能諸事心を附、昼夜無油断可有勤仕事

一、喧嘩口論之儀相慎、下々至迄入念可申付事

一、御休・御泊之宿ニおゐて火之元之儀可申付事

一、御休・御泊之宿ニ而若出火之事有之候節、早速御本陣江集り風並

悪候ハ、宜方江御供可仕事

一、召連候面々下々ニ至迄道中押狼藉一切不仕様可申付事

一、万事渡辺甲斐守・大河内相模守・本多隼之助・戸川助次郎任差

図、諸事入念相勤可申事

右之趣堅可相守候、以上

七月晦日

(朱書)

「六拾貳ノ下」

同年八月廿八日御迎為御用御中間押・御小人押今朝出立、御届書

壹通御部屋孝益を以御当番鵜殿甚左衛門殿江差出ス

(朱書)

「六拾三」

一、今度御下向御用として明朝出立致候御小人押御届之儀、いつれ

ニ而申上候哉之旨当番所御徒目付組頭より問合有之候ニ付先年

之書留調候処、御小人押之義無之相分不申候ニ付御徒押豊田伝

次郎江下掛合いたし候処、御小人押ニ不相拘御徒押計ニ而当番所

江御届書さし出候先例之旨申聞候ニ付、組頭依田源十郎江掛合、

御中間押・御小人押之分者頭共より御届申上候積り候事

但明日御当番ニ而可然御取計可被下候

酉八月廿一日

外山和太夫

(朱書)

「六拾四」

同年八月安芸守殿御渡

寿明君御方御着之節御道筋、板橋宿より巢鴨通り、土井大炊頭

下屋敷前・森川宿より松平加賀守屋敷前通、本郷貳丁目より右

江、壹岐坂・水道橋・小川町通・一ツ橋御門・平川口御門

右之通候間可被得其意候

酉八月

同断

寿明君御方江戸御着之節、板橋宿より御道筋人払之儀御徒目付

・御小人目付相勤候様可仕候、尤御徒方よりも相加へ可勤事

一、御道筋人留之儀、人留ニ不及候、御通り之先江立留可申御見通し

二而も遠き所者人留ニ不及候、少し先江見之候程之儀者不苦候事

一、御通り筋之屋敷々々大門者締、くゝりハたて寄せ置可申事

一、長屋等窓蓋ニ不及候、内より戸をたて置可申事

但並手桶差出ニ不及候事

一、掃除之儀御道筋者格別、御見通場所者不及其儀候事

一、御道筋御門番人御番所江相詰ニ不及候事

右之通可被相触候

八月

(朱書)

〔六拾五〕

同年九月廿九日越中守殿御渡、市右衛門殿御達

寿明君御方来月三日江戸 御着之事

九月廿九日

(朱書)

〔六拾六〕

一、寿明君御方御迎御用之者三十日休可申渡旨隼之助殿被仰渡候間

廉々江可申渡旨、当番所組頭依田源十郎相達候ニ付、中小組頭江

其段申渡置候事、且御小人押休日之儀者御徒押山川又兵衛申渡

候旨御中間押山口金左衛門相届候事

十月四日

(朱書)

〔六拾七〕

同年十月十四日越中守殿御渡、甚兵衛殿御達、当番所大浜佐次右

衛門より相達ス

一、明十五日惣出仕有之候旨其段可被相触候、尤如例月月並御礼も

有之候事

但御縁組被 仰出候ニ付而之惣出仕

一、右大將様江寿明君御方御縁組被 仰出、御結納者十一月上旬、御

入輿同月下旬たるへく旨被 仰出候

姫君様与可奉称候事

一、寿明君御方御入輿御用掛り伊勢守殿 安芸守殿被 仰付之

十月十四日

(朱書)

〔六拾八〕

同年十月廿四日安芸守殿御渡、隼之助殿御達、当番所榊原栄五郎

相達ス

姫君様 西丸江御移徙十一月廿二日朝五ツ時

御出輿同日

御婚礼

(朱書)

〔六拾九〕

同年十月

御徒目付組頭江

来月五日 姫君様 御入輿御道具被遊 上覧候旨被 仰出

候ニ付、奥御断もの等中御廊下迄被出候ニ付、表坊主罷出居候間

中之口江御徒目付罷出御用向陰時計江可申込候、諸事前々之通表

座敷向被遊 御覧候節之通可被心得事

十月

遠山半左衛門

本多隼之助

同年十一月六日

(朱書)

〔七拾〕

御結納御当日并惣出仕之節共 御城内外御門々々当番衣服之儀熨斗目麻上下着用可為仕候、同心ハ役羽織着用可仕候、役羽織無之向者服紗小袖麻上下着用可為仕候  
一、御用向取扱支配向之義者無地熨斗目通小紋ニ無之麻上下着用可為仕候

右之通伺相濟候事

十一月四日

遠山半左衛門  
本多隼之助

(朱書)

〔七拾壹〕

御徒目付組頭江

来ル六日 右大將様御結納之御祝儀有之候、溜詰堀田備中守  
・松平式部少輔<sup>(大)</sup>、御譜代大名・雁之間詰・御奏者番・菊之間縁  
頼詰何れも父子共布衣以上御役人無地熨斗目着用、五ツ半時登城 御本丸相濟西丸江も登 城有之候

一、右為御祝儀同九日 御本丸 西丸江惣出仕可有之候、無地ニ而も腰明ニ而も熨斗目通小紋無之上下着用候事

但老中大和守 御本丸・西丸若年寄中江も可被相廻候

十一月

(朱書)

〔七拾貳〕

黒鍬之者頭  
御掃除之者頭  
御中間頭  
御小人頭  
江

御婚禮当日為御祝儀西丸江相詰候末々輕キもの江者御酒部屋前ニ而御酒被下候ニ付、人数書今明日中可差出候事  
西十一月六日 林 内蔵頭

(朱書)

〔七拾三〕

一、御結納被為濟候為御祝儀来ル九日 御本丸江西丸江惣出仕、夫より御老中方大和守殿 御本丸・西丸若年寄衆江廻勤有之候ニ付、外桜田御門・馬場先御門・和田倉御門右三ヶ所御門外下馬所ニ相成申候

右者諸事前々三ヶ所下馬所ニ相成候節之通可被相心得候、以上  
西十一月四日 遠山半左衛門  
本多隼之助

(朱書)

〔七拾四〕

御徒目付組頭江

姫君様御道具参り候刻限之儀五ツ時より参り候間、差添之者六ツ時御広敷江相揃候事

一、御掛り伊勢守殿・安芸守殿六半時頃ニ丸銅御門・汐見坂御門より御広敷江御越ニ付、御門々々江為心得可申渡候

十一月五日

遠山半左衛門  
本多隼之助

(朱書)

〔七拾五〕

同年十一月 日主膳正殿御渡、市右衛門殿御達

一、御引移御当日溜詰堀田備中守・松平式部大輔始御譜代衆・雁之

間詰・御奏者番・菊之間縁頼詰・同嫡子・布衣以上之御役人四

少時服紗小袖麻上下着用可有登 城候事

但西丸江者出仕二不及候

一、御婚礼相濟候ニ付来月五日御三家方始諸大名・諸番頭・諸物頭・

諸御役人・寄合面々四少時無地熨斗目半袴着用 御本丸江登

城候事

但在国・在所之面々者 御婚礼之義承り候上、追而老中大和守

江使札可差越候事

右之通可被相触候

西十一月

同年十一月 日安芸守殿御渡、甚兵衛殿御達

御婚礼ニ付溜詰堀田備中守・松平式部大輔、御譜代大名・雁之

間詰・御奏者番・菊之間縁頼詰・同嫡子・布衣以上之御役人四

少時無地熨斗目通し小紋ニ而無之半袴着用可有登 城候、尤西丸江

も出仕可有出仕候事

右為御祝義翌廿三日御三家方始寄合之面々四時無地ニ而も腰明

ニ而も熨斗目且又通小紋ニ而無之半袴着用登 城、西丸江も出仕

可有之候

一、出仕之面々老中大和守 御本丸・西丸若年寄中江も可被相廻候

但隠居・幼少・病氣之面々者月番之老中且大和守宅江以使者御

祝儀可申上候

一、在国・在邑之面々者以使札御祝義可申上候

但在国・在邑之面々隠居・住屋住者・拾万石以上者使札、其

外者可為飛札候

右之通可被相触候

西十一月

伊勢守殿御渡

殿中有合之面々無地熨斗目通小紋ニ而無之上下着用候事

右之通向々江可被達候

西十一月七日

(朱書)

〔七拾六〕

一、御婚礼相濟初而 御簾中様 御本丸江被為 入候節、御供其外

相勤候支配向羽織請取方御断、天保十二年之御振合を以取調

早々可申聞段、西丸当番所佐藤慎兵衛・鈴木觀之助より書中を

以申来候ニ付、承知之旨返書遣し御供組頭浅見孫兵衛江申渡候

西十一月十二日

御婚礼相濟初而 御簾中様 御本丸江被為 入候節新規

羽織受取候人数書

御小人目付

拾老人

御小人押

五人

野方御使之者

拾人

御使之者

拾老人

右之通天保十二丑年十二月之振合を以取調、西丸御徒目付掛り  
佐藤慎兵衛・鈴木觀之助江差出候様、西丸御使組頭江申渡置候  
事

西十一月

(朱書)

〔七拾七〕

同年十一月十五日

来ル廿二日 姫君様西丸江 御移徙之節御行列并御供建場・  
開場共前々之通西丸江被為 入候節之通り候事

一、御供之面々縊股立・足袋相用候事

一、御供之面々開キ道ニ及不申候事

十一月十五日

遠山半左衛門  
石谷鉄之丞

(朱書)

〔七拾八〕

来ル廿二日 姫君様西丸江 御移徙之節御道筋御広敷より汐  
見坂御門・二丸銅御門・蓮池御門通・西丸御裏御門御同所御広  
敷江被為 入候事

一、右御道筋御門々々頭々御番所江相詰候 御通行之節、御番所前江  
罷出候様可致候、尤与力・同心も同様罷出平伏いたし罷在候様  
可致候、勿論頭々并上下着用同心者役羽織為着候様可致候事

但役羽織無之面々者服紗小袖麻上下為着候様可致候事

一、翌廿三日西丸より 御本丸江五百八拾之餅御取替之節、御祝儀

御使御道筋西丸御納戸口より蓮池御門・寺沢御門・中御門・御

玄関前御門 御本丸御広敷

一、一条殿使者者 御本丸御玄関より蓮池御門通り西丸御台所口

御同所御玄関より登 城候事

一、右道筋御門々々与力熨斗目麻上下同心者役羽織為着候様可致候  
事

但役羽織無之向者服紗小袖麻上下着セ候様可致候事

右之通向々江相触候、依之申達候事

十一月十五日

遠山半左衛門  
石谷鉄之丞

(朱書)

〔七拾九〕

御徒目付組頭  
火之番組頭 江

来ル廿二日 姫君様西丸江 御移徙之節、御供之面々有合熨  
斗目返し(マキ)小紋ニ而無之麻上下着用之事

一、同日 御婚礼御用掛り之面々加珍無地熨斗目着用之事

一、右之節 殿中御夜詰迄無地熨斗目通し小紋ニ而無之麻上下着用、  
御目見以下之者者有合熨斗目着用之事

右之通伺相済申候、依之申達候事

西十一月

遠山半左衛門  
石谷鉄之丞

(朱書)

〔八拾〕

同年十一月十八日

御婚礼相済候為御祝儀来ル廿三日 御本丸・西丸江惣出仕、

夫より御老中方・大和守殿・西丸若年寄衆江廻動も有之候ニ付、  
外桜田御門・馬場先御門・和田倉御門三ヶ所御門外下馬所ニ相  
成申候、諸事前々右三ヶ所下馬所ニ相成候節之通可被心得候  
西十一月十八日  
遠山半左衛門  
本多隼之助

(朱書)

〔八拾壹〕

同年十一月廿日

御徒目付組頭江

姫君様 御移徙之節御注進

一、御広敷被遊

出興候由

一、蓮池御門迄

御先見候由

御本丸  
西丸  
御広敷江

西丸  
御広敷江

一、西丸御広敷江

被為 入候由

御本丸  
御広敷江

右之通伺相濟候ニ付申渡候、先格之通御道筋当番書自分江可差出  
候事

西十一月廿日

遠山半左衛門  
本多隼之助

(朱書)

〔八拾貳〕

来ル廿三日五百八拾之餅御取替玄蕃頭殿 御使被成御勤候間、

御門々々為心得道筋并 御使御勤之刻限等左之通可申渡候

一、御使御刻限六半時

一、道筋西丸御納戸口より御裏御門・蓮池御門・寺沢御門・中之御

門・御玄関前御門より御広敷江御越、御広敷相濟御納戸口より

御上り御退散之節者、御台所口より汐見坂御門・二丸銅御門・下

乗橋より内桜田御門・西丸大手御門通

一、京都御使御留守居差添西丸相廻り御玄関より登 城ニ而案内御

小人目付差出シ可申事

一、御使玄蕃頭殿西丸江御登 城附人差出可申事

一、伊勢守殿より西丸 御使玄蕃頭殿江御状出候間、急キ可差遣御

使之者手当有之、尤兩人ニ而差遣候事

御使玄蕃頭殿西丸御納戸口御出被成候附人御使之者四人掛り御

徒目付承り合参り候様可申渡事

西十一月廿日

遠山半左衛門  
本多隼之助

(朱書)

〔八拾三〕

同年十一月廿二日鉄太郎殿ニ遣

御婚礼相濟翌廿三日出仕之節 公方様御駕籠台より西丸江被

為 成候ハ、出仕之面々御玄関前中之口迄召連候供廻り之儀

差掛候而者混雜可仕候間、登 城候ハ、直ニ中仕切御門外江見計

相払置退散程合見計操入候様可仕候哉

但御徒目付・御小人目付附置差引可為仕候

一、諸家留守居之儀も主人登 城候ハ、早速面々主人供廻り払置候

場所江退キ罷在候様仕、蘇鉄之間・中之口辺江一切差置不申候様

可仕候哉

右之通奉伺候処伺之通被仰渡候ハ、向々江も申談候様可仕候、以

上

右之通右京亮殿江伺候処伺之通被仰渡候間向々江も申達候、依之為心得申達候、以上

十一月廿一日

当御番

御目付中

林 内蔵頭

(朱書)

〔八拾四〕

同年十一月 日西丸当番所より相達候趣、御同所御使組頭山本庄一より差越候ニ付承附いたし返却

黒楸之者頭

御中間頭 江

御小人頭

御婚礼相済来ル廿五日 御簾中様初而 御本丸江被為 入候

節御供人数書今明日中可差出候事

西十一月

林 内蔵頭

但人数書先達而羽織受取方之通相認メ西丸御使組頭より掛り

江差出候

(朱書)

〔八拾五〕

一、姫君様今廿二日西丸江 御移徙 御婚礼被為済候ニ付、今日

より 御簾中様与可奉称旨御達之趣、当番所大浜佐次右衛門

より相達申候

(朱書)

〔八拾六〕

同年十一月廿三日安芸守殿御渡、仁十郎殿御達

今度 右大将様 御婚礼相済候為御祝儀来ル二日 九日 御能有之見物被 仰付候間、御留守居・諸番頭・諸物頭・布衣以上之御役人、且又御目見以上之御役人・寄合・小十人組迄、儒者・医師、西丸共右両日之内五ツ時可有登 城候

但二日 九日之内申合両日之内半分ツ、可被罷出候、小普請之面々者月並出仕いたし候分計罷出可申候

一、右御礼之儀者来月十一日老中・大和守 御本丸、西丸若年寄衆可被相廻候

右之通可被相達候

西十一月廿三日



(朱書)  
「五百四十九」  
「八拾七」

五役頭江

来春小金御鹿狩之節御供其外出役等罷出候者人数、寛政度之振  
合ニ取調早々可申聞事

申四月三日

松平式部少輔  
遠山半左衛門

(朱書)  
「八拾八」

伊勢守殿  
主膳正殿 御渡、甚兵衛殿御達

来春小金御鹿狩被 仰出候ニ付御場所江罷越候面々遠馬・遠足等  
平均被致可然事ニ候、右道法之儀者凡御曲輪内より六七里程ニ而  
其日限り之場所者勝手次第可被相越候、関所又者舟渡等有之ケ所  
者其旨相届、頭支配之分者其頭支配より届差出候様可被致候、右  
者平均專一之儀ニ候間可成丈諸事手輕ニいたし、遊山ケ間敷儀無  
之農業等之礙ニ不相成候様心附、下々迄も聊不慎之儀無之様  
精々其段可被申付候

右之趣向々江可被相達候

申四月六日

遠馬・遠足平均之儀別紙之通相達候得共小金筋之儀御場御普請  
等も有之事ニ候得者遠慮致し、尤罷越候面々酒興ケ間敷儀無之様  
可致旨寄々可被達置候事

申四月六日

来春小金御鹿狩被 仰出候ニ付御場所江罷越候面々遠馬・遠足為

平均罷越候節、何れ之場所江罷越候与申儀其節々兩三日以前自分  
共江申聞其上ニ而可相越候事

申四月九日

柳生播磨守  
松平式部少輔  
遠山半左衛門

(朱書)  
「八拾九 百拾六と組」

御徒目付組頭

来春小金御鹿狩之節紀伊殿并右衛門督殿・刑部卿殿ニも右場所江  
被相越御見物被在之候様 御内意被 仰出候、依之為心得申達  
候事

申四月十一日

柳生播磨守  
松平式部少輔  
遠山半左衛門

(朱書)

「九拾 八拾八と組合」

御徒目付組頭

来春小金御鹿狩ニ付遠馬・遠足等ニ罷越、慎方之儀等先達而申達  
置候得共下々輕きもの其弁無之自然不行届之儀出来、後日御沙  
汰等も有之候而者主人之難儀ニも及候而者御趣意ニも不相叶候間、  
所々方角江御徒目付・御小人目付相廻、不束之儀有之候者申聞候  
様申渡置候間、其旨相心得家来等江急度可被申渡置候事

申四月廿三日

松平式部少輔  
遠山半左衛門

(朱書)

「九拾壹」

御徒目付組頭

一、惣始之相図

玉なし五拾目筒ニ放打、其次五放ツルへ打、但此節惣勢子玉

なし鉄炮放勢子声ニ而答一之踏留江寄

一、惣仕廻之相図

惣始之通五拾目筒ニ放打、其次五放ツルへ打、但此時何れも

小屋場江引取可申候

一、百人組 御持 御先手 持所江寄候相図

白吹貫 答

鉄炮ツルへ

勢子声

右何篇も同断

一、歩行立始之相図

白塵

但初貝吹候以後此塵ふり候筈

答

太鞆

但初声ニ打立場迄詰一文字ニ立並、早々打候而御網際江詰よせ

鹿突可申候

右者何篇も同断

於小金始終馬上ニ而相勤候番頭・物頭其外御番衆ニ而も股引・立

付・裾細之内勝手次第着可致候

但裾細着候ハ、脚半付可申候

右之通向々江可被相達候

一、馬上・歩行立共ニ脇差計

一、鑓印者馬上・歩行立共ニ無之候

番頭始其外物頭等竹柄之鑓為持候事勝手次第可仕候、且又菅笠

も為持候様ニ可致候、菅笠為持候義者馬上之者計ニ候事

但竹柄之鑓・菅笠口附之者江為持候様可仕候事

小金 御成之節産穢・忌中之面々無構罷出候様ニ向々江可相達

候

申四月廿七日

(朱書)

「九拾貳」

小金御鹿狩御用ニ付彼地江罷越候諸役人旅宿賄方之儀、寛政度之

振合を以同済之趣先達而及御達候処、右者小金原領村々之内金ケ

作・日暮・河原塚三ヶ村限り候儀ニ而、其余之村方者寛政度も木

錢・米代ニ而止宿致候間此度も同様之積り、且寛政度手賄入用・

仕上高等相糺候処、老入当凡積割合ニ見合余分之渡方相成候向

も相見、格別不同相成候而者相当共難申候間、此度之儀者手賄又

者旅籠払ニ致候得共別紙割合之通相極、右之内ニ而木錢・米代引

落増御手当被下候積、尤村方江も為心得其段申渡置候

右之通伊勢守殿江猶又申上候段、御勘定奉行申聞候、依之申達候

事

申五月

松平式部少輔  
遠山半左衛門

寛政度郡代方手賄入用上下平均一日老入

一、錢貳百四拾八文

牽馬老疋一日飼料

一、錢五百文

旅籠錢上老入老泊昼弁当共賄三度一日分

一、錢貳百文 但錢百文ニ付白米老升替之積

但泊無之昼食計老度申付候節者、右錢貳百文之半旅籠百文相拵候積

同下老入一泊昼弁当共賄三度一日分

一、錢貳百文

内 錢百四拾八文 旅籠代  
錢四拾八文 夜具損料・炭・油代之定錢

但泊無之昼食計老度申付候節者、右百四拾八文半旅籠七拾貳文相拵候積

同牽馬老疋一日飼料

一、錢三百文

右之通取極右之内ニ而木錢・米代引落増御手当被下候積

申五月廿四日

(朱書)

〔九拾三〕

御徒目付組頭江

来春小金御鹿狩之節御前日出立之分者不及御届、御用相濟罷帰候節者翌日御支配限り御掛江御届罷越候積伺相濟申候、依之申達候事

申七月十一日

柳生播磨守  
松平式部少輔  
遠山半左衛門

(朱書)

〔九拾四 九十七与組合〕

御徒目付組頭江

御使番

戸川助次郎

仁木次郎八郎

一色邦之輔

酒井織部

滝川主殿

稻垣金之丞

土方八十郎

水野甲子二郎

細井宗左衛門

大久保外記

右者御番方一組五人宛都合百人罷出、追驅騎馬相勤候世話可被

致候、但一番之追留迄之追驅騎馬相勤其後頭々之手ニ付可申候

西丸御目付

松本十郎兵衛

御使番

松平久之丞

本多弥八郎

右老入宛步行立之御番衆江附可申候、尤馬ニ而可被相勤候

御目付

石谷鉄之丞

御使番

戸川助次郎

一色邦之輔

滝川主殿

土方八十郎

細井宗左衛門

此五人者追驅騎馬勤候御番衆世話仕候内より兼可被勤候

右百人組御持御先手之場所見廻り可被申候、尤馬ニ而可被相勤候

御目付

本多隼之助

西丸御目付

松平上野介

御使番

久留十左衛門  
永見健次郎

右為 御用馬上ニ而 御立場辺可被罷在候

右之通相達候事

七月廿日

(朱書)

「九拾五」

小金原為御鹿狩来三月被為 成候間、諸事其心得を以取調候様

向々 江可被達候事

申八月八日

(朱書)

「九拾六」

小金原御鹿狩之節之儀ニ付、勤方等先格取調可差出旨先達而相達

置候処今以差出不申候、右書留有無共可申聞旨御用所高橋金之

助を以御達御座候

右御達之趣御小人目付世話役・御供組頭江も申渡候

八月廿六日

(朱書)

「九拾七 九十四与組合」

御徒目付組頭江

御目付

戸田能登守

来春小金御鹿狩之節百人組御持御先手場所見廻り馬ニ而可被勤  
候

御目付

石谷鉄之丞

小金御鹿狩御用被 仰付候ニ付、百人組御持御先手之場所見廻  
り之儀 御免被成候

御徒目付組頭江

小金御鹿狩御用取扱松平長門守代り自分相心得候様主膳正殿被  
仰渡候、依之為心得申達候事

九月十七日

石谷鉄之丞

(朱書)

「九拾八」

御徒目付組頭江

一、来春小金御鹿狩之節小屋場江致止宿候御先勤之もの賄方左之通

大御番頭・御書院番頭者自分上下并与力・同心上下共、頭々ニ而

賄候事

一、右之外諸役人 御目見以上之面々者銘々上下共自分賄ニ候事

一、御目見以下之もの者銘々上下共焚出飯・香物等被下候事

但 御目見以下之内大御番・御書院番・与力・同心之儀者頭々

ニ而賄候間、焚出飯・御扶持方等不被下候事

一、奉願御先勤仕候者者焚出飯・御賦・御扶持方共不被下候事

一、小屋場近辺江飯小屋取建、御代官方ニ而焚出致候事

一、銘々賄之分者御代官ニ而焚出飯・馬飼料等御扶持替金壳上仕、右

小屋場おみて相渡追而代銭相納候事

右之趣伺相濟申候、依之申達候事

十月廿七日

遠山半左衛門  
石谷鉄之丞

来春小金御鹿狩之節御扶持方被下候分左之通

御供方之内勢子相勤候向々江者御賦被下候而も分限高五割増之

御扶持方被下候事

一、騎射之面々分限高五割増御扶持方被下候事

一、御先勤之内小屋場江致止宿候 御目見以上之面々江者焚出飯不

被下候事

分限高五割増之御扶持方被下候事

一、鎌ヶ谷・酒井根・松戸勤番・御先手・松戸固御徒、右頭・組共分

限高五割増之御扶持方被下候事

一、小屋場御囲内江入不申 御成前罷越止宿仕、焚出飯・御賦・御

賄共不被下者者分限高五割増之御扶持方被下候事

一、御扶持方被下候義者御前日・御当日共兩日被下候事

右之趣伺相濟申候、依之申達候事

十月廿七日

遠山半左衛門  
石谷鉄之丞

(朱書)

「九拾九」

一、松戸通相越候面々、市川通り相越候面々、往還共二道一筋宛相極

候事

一、翌日当番之分御狩相濟候ハ、小屋場江引取早速罷帰候様しめし

合可申事

一、松戸通り罷帰候面々者前日罷越候節も松戸通り可相越候事

一、市川通り罷帰候面々者前日罷越候節も市川通り可被相越候事

但差添候御目付・御使番も道筋可為同断事

一、市川通り罷帰候面々者御狩相濟小屋場江引取 還御之御左右承ニ

及ばず可罷帰候事

一、翌日当番之外罷帰候面々者御狩相濟小屋場江引取 還御御左右承

り可罷帰候事

一、御狩より小屋場江引取候頭・組共ニ 御立場御見通シ罷通候義不

及遠慮候事

一、市川通り罷帰候者共 還御之刻早通不申様ニ留可申事

右之通伊勢守殿・主膳正殿被仰渡候、依之申達候事

申十一月十三日

柳生播磨守  
遠山半左衛門  
石谷鉄之丞  
川勝中務  
松平豊前守

(朱書)

「百 百式与組合」

御徒目付組頭江

御鹿狩之節番頭始御役人而騎馬步行立其外立切勤方心得御場  
掛りより申談、於駒場原平均有之管ニ候間、向々江申談取調早々  
平均有之候様可被取計候

申十一月廿六日

遠山半左衛門  
石谷鉄之丞

(朱書)

「百壹 百五拾五与組合」

一、在方出役之者来春小金御鹿狩ニ付村方取調として御場所江罷越候

旨、御用所田中勘左衛門江引合之上半左衛門殿江申上候処、存寄無之旨被仰聞候ニ付、最寄村々江達之儀御勘定奉行衆江達書面御同人江出ス〔朱書〕  
十一月廿六日  
〔此書面百五十五番ニ有之〕

〔朱書〕  
〔百貳 百与組合〕

御徒目付組頭江

於駒場野小金御鹿狩習試有之候節々、同所江茶所取建有之候、依之申達候事

十一月廿九日

遠山半左衛門  
石谷鉄之丞

〔朱書〕  
〔百三〕

御徒目付組頭江

去月晦日於駒場野御鹿狩習試之節、供方之もの水野大監物下屋敷ニ溜置候処、於右場所如何之事共有之哉ニ相聞候、向後習試節々供方之者共一同如何敷儀無之作法能取締方相立候様、其主人々々より急度可申付置旨、伊勢守殿・主膳正殿被仰渡候、依之申達候事

申十二月五日

柳生播磨守  
遠山半左衛門  
石谷鉄之丞

来春小金御鹿狩ニ付御先手組之与力・同心より諸向江出役之者元組人数不足致し差支候節者右出役之者御鹿狩御用之方為相勤候様、尤御先手より掛合も可有之候間差支無之様可致旨、兼而向々江相達置候様主膳正殿被仰渡候事  
申十二月九日

〔朱書〕  
〔百五〕

御徒目付組頭江

御風呂屋口より大手御門通常盤橋御門、本町通り両国橋上之

御召場より 御船ニ被為 召、大川通り千住大橋際 御上

り場より被為 上、千住往還通り水戸橋通り新宿仮橋・松戸船

橋 御渡越

御小休 松戸宿松竜寺

右相濟 御狩場被為 成 御膳所小金原 御立場

還御御道筋 御成掛之通り

右之通伺相濟候旨御小納戸頭取申聞候、依之申達候事

申十二月十一日

遠山半左衛門  
石谷鉄之丞

〔朱書〕

〔百六 百拾与組合〕

一、寛政度御鹿狩之節、在方出役之もの惣人数承知致度旨御用所御小人目付高橋金之助申聞候間、明後廿三日御調御差出有之候様在方年番榊原氏方江申達候之事

十二月廿一日

〔朱書〕  
〔百四〕

御徒目付組頭江

(朱書)

〔百七〕

黒鋏之者頭  
御中間頭 江  
御小人頭

来春小金御鹿狩 御成之節、懸隔御場所 江 出役致し或者先御道具才領、又者刻限不定之御用相勤候御小人目付・御使之者 并御道具持運・御挑灯持等 罷出候黒鋏之者等 江 焚出飯・御賦等之御手当被下候義、両三日以前又者御前日・御当日罷越候ものとも右御手当出来候共懸隔候場所 江 御賦・焚出飯等為持遣候 而者費之筋 二も相当り可申与奉存候間、前書之御用 二 罷出候御小人目付・御使之者 江者一日老入銀三匁錢七拾七文ツ、黒鋏之者 江者一日老入銀貳匁ツ、被下置候旨伺相濟候間、此段申達候事  
申十二月廿五日

遠山半左衛門  
石谷鉄之丞

(朱書)

〔百八〕

御徒目付組頭 江

来春小金御鹿狩之節 御成前夜御夜詰之儀、御定刻引御座敷諸勤番 并表向御門々々勤番等御夜詰前之通 二 而前段御門明キ御沙汰無之積

- 一、御掛御老中方・若年寄衆 并御供若年寄衆者 御成前御登 城有之、御留守番之御方御殘等者平日遠 御成之節之通 二 而候事
- 一、御成相濟候ハ、勤番向者其儘居置御玄閑締切御門々々締候 而潜御門より往来為致候事

但御裏通御門々々之儀者平生之通 二 而候事

右之通伺相濟候事

申十二月廿六日

遠山半左衛門  
石谷鉄之丞

(朱書)

〔百九〕

御中間頭 江  
御小人頭

百姓之娘・妻子杯御場所 江 拝見出候事不苦候、此事御鳥見より寄々咄しいたし為知可申事  
右之通御小納戸頭取申聞候間、此段申達候事  
申十二月廿七日

遠山半左衛門  
石谷鉄之丞

(朱書)

〔百拾〕 百六与組合

一、寛政度御鹿狩之節在方出役ヶ所 并出役之者名前書共懸り御徒目付田中勘左衛門 江 差出ス

(朱書)

〔百拾壹〕

御徒目付組頭 江

当春御鹿狩 二 付請取物 并御人断其外御断物等早々取調当月晦日迄 二 自分共 江 可被差出候事  
正月十二日

遠山半左衛門  
石谷鉄之丞

(朱書)

〔百拾貳〕

当番所より差越承附御徒押 江 相廻ス



小金御鹿狩之節罷出候向々彼地之模様一見仕置候方申合之心得  
ニも相成候ニ付、相望候もの共申合人数少々ツ、御場出来之程合  
見計差遣可申旨、尤罷越候面々伺書進達候様伺相済申候、依之  
申達候事

正月

遠山半左衛門  
石谷鉄之丞

(朱書)

〔百拾三〕

酉正月廿六日御達

五役頭江

小金御鹿狩之節御供相勤候もの江御賦・赤飯被下候分左之通

一、両国 御召場より御船江乗込候御供方者御船ニ而御賦被下候、同  
所より陸通千住江相廻り同所 御上り場より御供致し候もの者  
同所ニ而御賦被下候事

一、御当朝松戸 御小休江着御供方者一同赤飯被下候事

一、御場ニ而者昼時前老度、御場済ニ而老度都合式度御賦り被下候事

一、還御之節千住 御召場より御船江乗込候御供方者御船ニ而被下候、

陸通り両国江相廻り同所より御供致し候もの千住宿ニ而御賦被  
下候事

右之通御賦四度赤飯老度都合五度被下候間、場所々々ニ而請取候  
人数分限委細相認メ二月十日迄差出候事

酉二月

遠山半左衛門  
石谷鉄之丞

(朱書)

〔百拾四〕

御徒目付組頭江

御勢子小屋場操掟書之内

一、於小屋場御当朝曉八半時南木戸ニ而老番貝吹せ候間、右ニ而一同  
食事致し馬皆具等しらへ腰兵糧用意可有之候事

一、式番貝吹候ハ、銘々小屋前江押出し 之方片寄候而人数屯いた  
し罷在繰出し之左右相待可罷在候事

但家来不相交様可致候、騎馬之面々者口附之もの老人ツ、召  
連小屋場より乗出し候迄不苦候事

一、明六時前三番貝吹候ハ、追駆騎馬之面々、南之方木戸より騎馬  
道通り乗出可申事

但老之組合江二木二郎八郎、式之組合江酒井織部、三之組合江  
稻垣鉄之丞、四之組合江大久保外記差引可有之候事

一、四番貝ニ而兩御番騎馬之面々 御書院番 組合御番順ニ乗出し、南  
之方木戸口より駆馬道通り可罷越事 御小性組

但戸田能登守・戸川助次郎・一色邦之助差添可罷越事

一、六番貝ニ而三番步行立場勢子順々ニ繰出し、西之方木戸より步行  
道通り可罷越候事

但松本十郎兵衛・滝川主殿・松平久之丞・土方八十郎・本多  
弥八郎・細井宗左衛門差添可罷越候事

一、七番貝ニ而御徒方・小十人・新御番順々ニ繰出し可申事  
但久留十左衛門・永見健次郎差添可罷越候事

右者小金御鹿狩之節、於小屋場書面之通相心得何れも七声ツ、  
貝吹候様御貝役江申渡候事



西正月

遠山半左衛門  
石谷鉄之丞

(朱書)

〔百拾五〕

小金御鹿狩ニ付、罷越候面々急病人等之節為手当 御成道并松戸  
通・市川通り、御同勢宿々ニ而駕籠六拾壹挺、村々ニ而八拾貳挺、  
小屋場内江拾七挺并乗物三挺手当有之候間為心得申達候事  
西正月  
遠山半左衛門  
石谷鉄之丞

(朱書)

〔百拾六〕 八拾九与組

御徒目付組頭江

小金御鹿狩之節、紀伊殿・御両卿方ニも右場所江被相越御見物被  
在候様、先達而 御内慮被 仰出候ニ付其段為心得申達置候処、  
紀伊殿ニ者御見物相止候旨被 仰出候、依之申達候事  
西二月  
柳生播磨守  
遠山半左衛門  
石谷鉄之丞

(朱書)

〔百拾七〕

一、御鹿狩之節御注進御用御挑灯并蠟燭御断、且御馬牽人差引并奥向  
衆騎馬口附差配仕候御挑灯・蠟燭共、御断・御扣共三通懸り御  
小人目付高橋金之助を以差出ス  
一、小金御鹿狩 御成御日限三月十八日之旨御徒目付笠原新左衛門  
相達ス

一、同断 御成之節在方人留出役之者伺書面・絵図共御附札之上御

下ケ

一、同断之節御中間頭老人 御先江罷出、代り合御供仕度旨伺書面江  
可為伺之通旨御附札有之御下ケ  
一、同断ニ付御中間頭組之者召連為御用弁、御場所見置度旨伺書面  
可為伺之通候頃合之儀者、追而相達可申旨御附札有之御下ケ  
右之通半左衛門殿御下ケ之積相心得可申旨口上添、懸り高橋金之  
助より差越ス

(朱書)

〔百拾八〕

御徒目付組頭江

別紙三通御小納戸頭取申聞候ニ付、御貝役押・御太鞍役江も可申  
達候事  
西二月  
遠山半左衛門  
石谷鉄之丞

御順見与して諸向立場前 通御之節、馬上之者不及下馬馬上ニ而  
平伏仕、歩行立之者者膝を突候迄ニ而不及平伏候、尤御狩初り候  
後被遊 御出馬立場前 通御ニ候共、歩行立之者膝を突下ニ居  
ニ不及、馬上之もの時宜ニ寄可申候、後口を被遊 通御候共馬立  
直ニ不及候事、御鹿狩平均 上覽之節之御番方一統組羽織、其  
外とも都而衣服之儀御鹿狩御当日之通有之候事  
於駒場野御鹿狩習試御見分ニ付右之趣御達申候  
右之外式通者主膳正殿・丹波守殿御出之節之儀ニ付留略之、委細者日  
記江記置候事

(朱書)

「百拾九」

五役頭江

伊勢守殿・主膳正殿御渡候御法令写差遣候、可被得其意候事

酉二月

柳生播磨守

遠山半左衛門

石谷鉄之丞

川勝中務

松平豊前守

小金御鹿狩ニ付而罷越候面々被仰渡候趣、弥無相違申合精出可被相勤候事

一、御先江相越候節、且又御狩相済罷帰候道筋刻限共相達候通不違様可被申合候、船渡等別而混乱無之様可被致候事

一、於御狩場者不及申往還共何様之申分有之候共、喧嘩・口論可被相慎候、下々至迄此旨堅可被申付候、若無抛子細ニ候ハ、当地江罷帰候以後可被申立候、吟味之上依理非可有沙汰候、万一騒々敷事候ハ、一組限之可為取計事

一、下々至迄不作法成儀無之作物等荒し不申勢子・人足其外百姓等ニ対し非儀無之様ニ可被申付事

酉二月十一日

(朱書)

「百貳拾 百廿三と組」

御徒目付組頭江

明十六日習試御見分之節而御番頭者宮益町より、御場内江召連候供人数ニ而罷越候ニ付、右場所より外供之分同勢場江下ケ候積有之候間、同勢場出役御徒目付・御徒押・御小人目付・御小人押・

御使之者等江右之趣心得可申候事

酉二月十五日

遠山半左衛門  
石谷鉄之丞

(朱書)

「百廿壹」

小金御鹿狩之節御前日又者御前々日より罷越止宿仕、焚出飯・御賦・御扶持分等不被下者江者、千住宿より御道筋最寄宿村々或者御場最寄村々等ニ而御賄被下候間、右場所々々江罷越候者有之候ハ、御役名并人数・地名等認分、来ル廿五日迄ニ拙者共江可被差出候事

酉二月

遠山半左衛門  
石谷鉄之丞

(朱書)

「百廿貳」

黒鍬之者頭

御中間頭

御小人頭

御駕籠之者頭

小金御鹿狩之節御場入口迄之御行列別帳之通伺相済申候、依之申達候、順覽之上早々拙者共江返却可致候事

酉二月

遠山半左衛門  
石谷鉄之丞

(朱書)

「百廿三 百廿与組」

黒鍬之者頭

御中間頭

御小人頭

御駕籠之者頭

江

於駒場野小金御鹿狩習試 上覽之節宮益町・道玄坂町等江御勢子面々下宿割当候ニ付、道玄坂上中豊河村百姓政五郎・佐兵衛方江下宿当置候間此段申達候事

西二月廿二日

遠山半左衛門  
石谷鉄之丞

御中間頭江

別紙尅通差遣候、承付之上早々自分共江可被相返候事

二月

遠山半左衛門  
石谷鉄之丞

近々於駒場御鹿狩習試

上覽之節、奥向之者馬牽人例年春秋

御成之節之通御差出有之候様致度候、尤諏訪部八十郎江懸合

罷出候様御達可被成候、奥向人数六拾人ニ有之候、依之此段及

御掛合候、以上

西二月廿四日

朝比奈甲斐守  
岡松八右衛門

(朱書)

〔百廿四 百廿七与組合〕

御中間頭

御小人頭

御駕籠之者頭

御中間頭

御小人頭

御駕籠之者頭

右之者小金御鹿狩ニ付兼而伺濟之通御場為一覽来ル七日松戸通

可罷越候事

一、銘々腰弁当持参之事

一、当朝五時頃迄ニ金ケ作村地内字南岡小屋場江罷越、自分小屋場

江可相届候事

一、金ケ作村地内字四方石江木札建置候間、右札ニ認置候通罷越候得者自然与小屋場江出候事

但小屋場江出候ハ、南木戸より出入可致候事

一、御場内江召連候供人数、三番頭者侍兩人・草履取老人、布衣以上者侍老人・草履取老人、其以下者供之者無之都而残置候積、尤残置候供之もの御場入口迄召連候而者混雜致候ニ付右之分者小屋内江相残し候事

右之通相心得、罷越候者姓名相認メ今日中自分共江可差出候事

西三月二日

遠山半左衛門  
石谷鉄之丞

覚

御中間頭

浅井七三郎

除キ 荒井林太夫

組之者 拾式人程

御小人頭

志賀長十郎

除キ 榊原栄五郎

組之者 拾式人程

御駕籠之者頭

組頭計

三人

右之通来ル七日小金御鹿狩ニ付御場為一覽罷越候様仕度、此段申上候、以上

三月二日

御中間頭

御小人頭  
御駕籠之者頭

右御用所御小人目付高橋金之助 江差遣候処、頭役之儀者諸向共老  
人ツ、二付不相成旨申聞候間、老入者除キ候事

(朱書)

〔百式拾五〕

御徒目付組頭江

松戸より馬操上心得

小金御鹿狩之節御供之布衣以上并奥向之面々松戸より御場江操  
上可申候、御場相濟候ハ、松戸同勢場江下ケ可申候、且 御成  
之節歩行御供中奥御番折井九郎次郎・渡辺兵部・三枝左兵衛

還御之節者御供不仕御場相濟小屋場より引取候間、右供之者  
松戸より南岡小屋場江操入 還御御供中奥御番内藤甚十郎・小  
菅内匠・太田運八郎・関大内蔵供之者引替 還御以前見計松戸  
同勢場江操下ケ可申事

酉三月三日

遠山半左衛門  
石谷鉄之丞

(朱書)

〔百式拾六〕

御中間頭

御小人頭

御駕籠頭

一、千住 御上場御供建場

一、千住 御上場御供開場

一、松戸 御小休松竜寺表門前御供開場

一、松戸 御小休松竜寺 御成之節御供建場

一、御成之節御場入口御供開場

一、還御之節御場入口御供建場

一、還御之節松戸 御小休松竜寺御供開場

一、還御之節松戸 御小休松竜寺表門前御供建場

右絵図面八枚小金御鹿狩掛り小島東作より差越、本書之儘御使組  
頭江相渡中小御供方江相廻ス

酉三月五日

(朱書)

〔百廿七 百廿四と組合〕

覚

御中間頭

老 人

右組之者

拾式人程

御小人頭

老 人

右組之者

拾式人程

御駕籠之者

組頭計

三人

右之通小金御鹿狩ニ付御場為一覽、明後七日五時頃迄ニ金ケ作村  
御小屋場江罷越可相届旨被仰渡御座候、然ル処右組之者之内

御成御道筋 御小休所近辺等御場所々々御馬操出候、御同勢  
置所・御賦所共見置并御注進御用相勤候者者申込御場所其外下宿  
手当申付方仕度旨夫々申出候ニ付、時宜ニ寄及差図候場所も可有  
之、且人数多ニも御座候間深夜ニ者引纏兼候ニ付、明六日夕七時

頃より一同召連罷越申候、依之申上置候、以上

三月五日

御中間頭  
御小人頭

右老通御鹿狩懸り御徒目付江打合置御掛り御目付衆御場江御越中  
二付、御当番能登守殿江右之段口上添中小申合差出ス  
但御馬方ニ右様之例有之候ニ付右之通取計候事

(朱書)

〔百廿八〕

御鹿狩之節御供并御先廻御馬牽人御中間人数覚

御供

一、御馬四疋

牽人

式人掛<sup>三</sup>而 八人  
外<sup>二</sup>手代り 式人  
牽人御中間 拾人  
御馬髮卷 壹人

右御供両国 御召場迄御供ニ相立、右場所ニ御供待無之一旦御厩  
江引 還御両国江相廻候事

御供  
一、御馬四疋

牽人御中間  
御成御供 拾式人  
還御御供同断  
御馬髮卷 壹人

右御馬前夜御厩より出候ニ付右牽人御中間御厩江相揃、夫より千  
住 御上り場江相廻り御場迄相立可申事

但 還御御供拾式人者御前日 御先江罷出代り合 還御御供○

千住迄相勤、夫より御厩江牽戻り申候事

○ 還御御供代り合之もの御先江罷越居候而も、御当日之外御賦  
り不被下候旨御達御座候、右之趣并下宿等之儀も御中間頭江

被仰渡可被下候

小金御厩江  
御召御馬三疋

御次拾疋

松戸仮御厩江

御召御馬式疋

御次御馬五疋

騎射馬拾三疋

右御馬御前日明ケ西丸下御厩より出候ニ付、右牽人御中間御厩江  
相揃常々遠 御成之節御先江廻り候節之通相心得候様

御先廻り之方江

御供組頭 式人

御馬髮卷之者

壹人

右者小金御鹿狩之節御供并 御先廻り御馬牽人書面之通御座候、  
此段御中間頭江被仰渡可被下候、右之外奥向手馬牽人之儀者奥御  
場掛りより御達申候義与奉存候左様御承知可被下候、且 御先  
廻り之分御馬牽人御賄并下宿等之儀者其御方ニ而御取扱御座候  
様仕度奉存候、以上

三月八日

諏訪部八十郎

(朱書)

〔百廿九〕

御徒目付組頭江

一、御供揃前夜九時

一、御成 還御共千住 御上り場其外御道筋、寛政七年小金 御

成之節之通可被相心得候

三月九日

(朱書)

「百三拾」

三月十八日

小金御鹿狩之節

御膳所

小金原  
御立場

右之通主膳正殿以御書付被仰渡候、依之申達候事

三月

柳生播磨守  
遠山半左衛門  
石谷鉄之丞  
川勝中務  
松平豊前守

(朱書)

「百三拾壹」

小金御鹿狩之節、御前日松戸通・市川通出立之面々先達而申達候刻限ニ松戸通り、千住大橋向明地・市川通・本所横川通り牧野遠江守下屋敷前江相揃、同所より刻限割ニ出立之積有之候、右者刻限通り揃候段差添御目付・御使番江御通達可有之候、御徒目付・御小人目付出役為致差引候

但先立之面々揃所無之内者、跡立松戸通出立之分ハ千住大橋手前ニ扣罷在、市川通之分者本所南割下水北側津輕越中守屋敷後口辺江扣罷在、出立済切候而扣所江相越候積  
右之通伺相済候ニ付、依之申達候事  
三月九日

(朱書)

「百三拾貳」

御徒目付組頭江

(朱書)

「百三拾三」

御中間頭

御小人頭

先達而相達候小金御鹿狩御行列之内、末之方供連騎馬朱ニ而詛書之儀、千住御上り場より奥向表方共松戸迄御行列ニ相立候様此度相成申候、尤 還御之節も同様ニ有之候、依之為心得申達候事  
三月十三日

遠山半左衛門  
石谷鉄之丞

(朱書)

「百三拾四 百三十八与組合」

一、御鹿狩之節、御先廻り御馬牽人江被下候御賄之切手、掛りより受取御供組頭江相渡  
三月十三日

千住御上り場より  
步行御供  
御小姓 五人  
御小納戸 拾五人  
同所供連騎馬  
御供  
御小姓 七人  
御小納戸 拾貳人  
内老人者松戸迄  
同所より供連  
騎馬御供

御小姓 拾四人  
御小納戸 四拾六人  
内式拾式人者牽人  
二不及

〆七拾七人

右牽人片口御中間・片口百姓御差出可被成候、尤右口附百姓之儀者各様方より郡代江御達ニ相成、差引御徒目付作略ニ而千住ニ相揃出役御馬乗江相渡候様致度、此段御達申候、以上

三月十三日

朝比奈甲斐守  
岡松八左衛門(右)

(朱書)

「百三拾五」

覚

千住宿揃

人足

三拾八人

右者来ル十八日於小金原御鹿狩之節、奥向衆手馬牽人相増候間、手足り不申候ニ付、右場所江前夜四ツ時相揃候様御断可被下候、以上

三月十三日

御中間頭

(朱書)

「百三拾六」

御徒目付組頭江

小金御鹿狩御当日 御成相濟候ハ、平日御夜詰相濟候振合

二而御前日之当番同役共、御座敷向諸御番所共一通り見廻候様可申談候哉

一、夜中御番所も引不申御番衆張切之事も御座候間、一同御湯漬被下与力・同心之類も張切之分御焼飯被下候積相心得可申哉

一、表五ヶ所御門之儀者御徒目付・御小人目付老兩度も為見廻候様

可仕候、風烈等御座候ハ、繁々為見廻候様可為仕候哉

右者平常遠 御成共違候ニ付此段奉伺候、伺之通被仰渡候ハ、同

役共御賄頭江私共より申談候様可仕候

右之通伺相濟候事

三月

遠山半左衛門  
石谷鉄之丞

(朱書)

「百三拾七」

遠山半左衛門殿  
石谷鉄之丞殿

伊勢守殿  
主膳正殿  
越中守殿  
但馬守殿  
丹後守殿  
因幡守殿  
主水正殿  
若狭守殿  
丹波守殿

右替馬松戸ニ而為請取 御成御跡江上り百姓ニ而為牽御小人之類

式人程一ト纏ニいたし 御立場脇御馬建近辺ニ差出候事

右之通御心得可被成候、依之御達申候、以上

三月十三日

朝比奈甲斐守  
岡松八左衛門

(朱書)

「百三拾八」

昨日御達申候奥向馬牽人之儀人数七拾七人之旨御達申候処、右者老人相減七拾六人ニ御座候間此段御達申候

右ニ而牽人宜御取計有之候様致度存候、以上

三月十三日

朝比奈甲斐守  
岡松八左衛門

(朱書)

「百三拾九」

御徒目付組頭江

御成之節千住より  
松戸迄供連騎馬

御目付

大沢仁十郎

御書院番

室賀美作守組与頭

瀨名源五郎

御徒頭

山川安左衛門

小十人頭

松前三郎兵衛

還御之節  
松戸より千住迄同断

御目付

戸川中務少輔

御小性組

跡部能登守組与頭

竹川善兵衛

御徒頭

神尾市左衛門

小十人頭

宮崎次郎太夫

右者小金御鹿狩之節書面之通供連騎馬ニ而御供仕候事

三月十四日

遠山半左衛門  
石谷鉄之丞

(朱書)

「百四拾」

御徒目付組頭

小金御鹿狩之節御供之御目付・御徒頭之馬者始終同勢場江差出、  
御場所為引揚候ニ不及候事

三月十四日

遠山半左衛門  
石谷鉄之丞

(朱書)

「百四拾壹」

覚

御中間方持場

御門番人

三拾五人

右者来ル十八日於小金原御鹿狩之節御前夜張切勤番仕候、以上

三月十四日

御中間頭

(朱書)

「百四拾貳」

御徒目付組頭

小金御鹿狩之節松戸宿割絵図面老通相達申候、承付明日中可被  
相返候事

三月十四日

遠山半左衛門  
石谷鉄之丞

御中間頭

御小人頭

御駕籠之者頭

小金御鹿狩之節 御巡見御行列書老冊申達候、一覽之上自分

共江可相返事

三月十四日

遠山半左衛門  
石谷鉄之丞



(朱書)

〔百四十三〕

主膳正殿御渡、甚左衛門殿御達

来ル十八日小金為御鹿狩被為 成候常々御鷹野 御成御留守之

通可相心得旨向々江可被達候事

三月十五日

(朱書)

〔百四十四〕

明後十八日小金御鹿狩 御成之節

御供番

御中間頭

荒井林太夫

右 御成 還御并 御巡見之節共御供仕候、以上

三月十六日

(朱書)

〔百四十五〕

一、御鹿狩御前夜并御当日夜同役老人組之者三拾五人、御湯漬断御

供石神辰之助を以差出ス

三月十六日

(朱書)

〔百四十六〕

一、明十八日小金筋 御成御刻限少々御引上ケニ相成候内御沙汰ニ

付、無急度相達候旨当番所丸毛慎兵衛申聞候

三月十七日

(朱書)

〔百四十七〕

一、一昨十八日小金御鹿狩 御成之節松戸宿より雨降候ニ付、組之

者濡御手当之儀御供之分中務少輔殿江相願候処御聞濟有之、右

ニ付御先之分鉄之丞殿江相願候処、同様御聞濟取調候様被仰聞候

但右之段彦兵衛江申談多人數之出方ニ付名前洩無之様且中小

格通差出候儀ニ付、不取締無之様一同相談之上取調可申旨

申渡并御中間目付・世話役江も為申談候

西三月廿日

(朱書)

〔百四十八〕

黒鍬之者頭

御中間頭

御小人頭

御小人目付

御使之者

黒鍬之者

右者小金御鹿狩之節兼而伺濟相達候通御手当相願候者人數取調、

早々可申聞候事

西三月廿三日

遠山半左衛門  
石谷鉄之丞

(朱書)

〔百四十九〕

一、御鹿狩之節 御巡見御供相勤候御中間頭・御小人頭・御小人目

付・御長刀役・御持鑓之者姓名申聞候様奥向より問合有之趣懸

りより相達候ニ付、夫々相認懸り御使小野益太郎江遣ス

西四月十日

(朱書)

〔百五十〕

伊勢守殿御渡、市右衛門殿御達

当春御鹿狩之節、鹿拝領之面々喰シ候向者穢日数之内ニ付明朝遠慮可致候、尤拝領致候而も食不致向不及遠慮候

右之趣向々江可被相達候

西閏四月十六日

(朱書)

「百五拾三」

嘉永二酉年三月十八日

(朱書)

「百五拾老」

西閏四月廿四日当三月十八日小金原 御成之節雨天濡御手当願・

御扣共三通、御月番中務少輔殿江差出

濡御手当願書可認入積

(朱書)

「百五拾貳」

西五月廿九日御用所森澄太郎作より和太夫受取来ル、下ケ札いたし返却

御目付方

御勘定所

当三月十八日小金 御成之節御先勤出役濡御手当御断ニ而被御申上候得共 御成ニ付候出役ニ而も傘相用不苦 御目遠之勤者相省、臨時之分者其時々伺之上御断御差出之積、元濟ニ有之候得者御伺ニ而可然筋与存候、御断御申上之儀者何様之訳柄ニ有之候哉、委細承知致度此段及御掛合候

西五月

書面之儀者御平常之儀与相心得申候、小金 御成之儀者格別

ニ而別段臨時与申儀無御座候、惣而定式与相心得、御断書面差

出候外ニ見合可申書面等無御座候、尤濡御手当相願候もの共

傘相用候勤柄無御座候、以上

四役頭

小金御鹿狩 御成御供并御先勤出方名面

御供揃前夜九時

一、定式御供

拾人

三 五人

是者十七日夕七時八十郎御厩江相揃暮六半時御馬出、夫より両国迄御供致し、但御供待無之一旦御厩江相下り又候 還御之節両国江相廻り江戸御供致し候事

御簾指

伊藤庄作

内山鎌四郎

西村平作

浅見鉄次郎

定番

山県熊蔵

一、同断

拾貳人

四 六人

是者同刻同所江相揃暮六時御馬出千住 御上り場江廻り居、同所より御場迄御供いたし候事

同断

有賀角之助

鈴木由之助

小永井彦七

真壁豊五郎

定番

横川鯉一郎

西村彦太郎

一、同断

拾貳人

割同断

是者十七日夕七時松戸江相揃 御成前御場江上り居 還御之節御場より千住迄御供致し、夫より御厩江牽下ケ候事

同断

野村幸次郎

佐久間勇助

秋元次郎助

荒井仙右衛門

定番

石原源吾 石川又吉

一、奥向無供騎馬口附 貳拾五人

是者十七日夕七時千住江揃居、御供ニ附上下共致口附候事

永井虎之進 高田庫三郎 高橋勝藏 風間新十郎

小川友三郎 平島龜吉 浜田清吉 荒井源三郎

高田東一郎 犬塚清藏 賑作振作 吉沢泰藏

一、奥向供連騎馬口附 六拾人

九 三拾人  
廿一

勤方前同断

村川幾之助 小宮山十郎左衛門 安藤嘉兵衛 完倉豊一郎

藤村伝十郎 小林徳五郎 小金井六太郎 藤村金吾

石原勇平 太田定次郎 斎藤九郎次 伊沢可十郎

八木田茂吉 永田友之助 池谷金次郎 小宮山太郎右衛門

和田卯十郎 田野村銀藏 鈴木弥吉 上村太吉

清水市三郎 井田茂八郎 今井才次郎 関口周作

柏原五兵衛 村川金三郎 川村惣助 伊沢健次郎

与十郎源助 深谷幸藏 江本酉之助

一、八十郎所 三拾人

六 拾六人  
八

是者十六日夜四時御厩江相揃、十七日暁八時御馬出 御先江相廻り上下とも致牽人候事

浅見久太郎 池谷錠太郎 柴田庄三郎 篠崎喜十郎

小林小伝次 大浜三之丞 加藤長之助 山県権之助

増田岩五郎 鳥飼文五郎 山本定藏 斎藤幾五郎

橋本半右衛門 才兵衛才兵衛 萩原禎次郎 長之助長之助 加藤歙吉 小伝次小伝次 小林官之丞

一、四兵衛所 拾五人 四 六人

勤方前同断

松本豊三郎 渡辺孝太郎 神谷龜平 川目市太郎

吉五郎養子 常次郎常次郎 長瀬伊三郎 松本藤太郎

一、又兵衛所 六人 貳 三人

勤方前同断

笹川周藏 近藤仙太郎 佐藤小三郎

一、七左衛門所 拾貳人 四 五人

勤方前同断

朝倉金之助 神谷富次郎 小山清右衛門

小岩井栄次郎 棚沢啓太郎

一、騎射口附 貳拾六人 八 拾五人

是者十七日夕七時松戸江相揃同所より御供ニ附御巡見ニも致口附候事

山県権左衛門 萩原才兵衛 横川瀬平 棚沢鉄三郎

神谷一作 山本大次郎 川目熊四郎 岡部又左衛門

川村弥三郎 太田又八 石原源太左衛門 石川定六

神田忠作 吉沢賑作 和田源次郎

一、松戸揃手馬牽替 拾五人 老組五人宛

是者前同刻相揃御場江牽上ケ候手馬之分、上下共牽人致し候事

市次郎倅  
野口米藏 清水金平 幸助倅  
高橋政太郎 庄作倅  
伊藤彦作 老人不足

一、御用意手代り之者 三拾人  
四 拾八人

前同刻松戸江相揃組頭差図次第相勤候事

岩崎市藏 桜井安次郎 龜田鉄次郎 三橋和吉

小宮山松三郎 山本八五郎 平井国輔 内山定三郎

川野和太郎 安五郎倅 今井長十郎 藤村董太郎 貫作倅  
河野貫一郎

捨次郎倅 高橋鉦之助 豊五郎倅 真壁鎌五郎 四人不足

都合式百五拾三人

五拾人 小組  
七拾七人 中組  
百式拾六人 此方

割外

一、世話役 六人 老組式人宛

是者千住・松戸・御場三ヶ所江式人宛相廻り、口附之者致差引候事

山本金六 田野村勝三郎 在方出役より兼  
宮川彦五郎

一、刀世話 三人 老人宛

是者千住下宿江罷越組之者刀世話致し下宿ニ残居申候  
小林新藏

一、御挑灯持 六人 式人宛

是者役所より御挑灯持參朝夕致世話候事

木津源太郎 竹中半之助

一、賄役 九人 式 四人

是者三ヶ所下宿江三人宛罷越御先之者江被下候御賄并御賦致世話候事

小金井長三郎 荒井賢藏 三橋国三郎 熊沢重五郎

一、差添組頭 御先廻り 三人

小 真壁栄作 竹中次左衛門 浅見孫兵衛

御供之分

一、御持鍵江戸御供 八人

近藤新平 柏原藤九郎 寺山六次郎 小林惣五郎

石原九左衛門 小俣千次郎 牧田平次郎 田口巳之助

一、同断 千住より 御供 拾人

小宮山桑三郎 鈴木兵次郎 安川小一郎 鴨下岩次郎

向田鉄之進 田中彦作 高橋正藏 斎藤九郎次

今井善右衛門 鈴木多喜三郎

一、同断 松戸より 御供 拾人

近藤惣次郎 吉田正三郎 堀内銀次郎 鹿島権十郎

成島弥左衛門 藤原勝之助 鳥飼万七 近藤覚三郎

川島捨藏 真壁銀之助

両国迄

一、御注進野方 八人

河野平八郎 高野作蔵 杉山祐左衛門 佐藤直次郎

中村亀三郎 神尾次三郎 小室直太郎 清水久三郎

千住御上り場より御場江  
一、同断 式拾人

船川小八 黒沢昇一郎 宇野市之丞 羽田正之助

田中祐三郎 三浦竜次郎 小林徳十郎 柳本保蔵

山本佐市 土戸永四郎 三橋利三郎 斎藤権十郎

三橋寅次郎 芦山八三郎 矢部繁次郎 小野藤之丞

西村勝蔵 山崎辰五郎 鈴木益作 田中鎌作

松戸御小休江被為 入候由御場江  
一、同断 四人

山口吉次郎 小野作吉 平山又一郎 渡辺兼三郎

同所被遊 出御候由御場江  
一、同断 四人

鈴木芳蔵 吉沢嘉一郎 長瀬邦次郎 和田金蔵

江戸江  
一、御場濟御注進 六人

木村文七 神谷藤蔵 向田庫之丞 富山弥十郎

山崎百太郎 佐野鋳三郎

一、御挑灯才領 式人

江戸 原田金平 御先 尾崎長作

一、御跡見廻り 式人

竹中藤十郎 高木専五郎

一、御鷹御用

勤方常 御成之節之通り 江本源助

一、御供組頭

江戸御供 黒沢善太郎 千住より 石井徳兵衛  
松戸迄 小組内組頭より御雇

一、御供御中間頭

江戸 杉野甚平 御先 荒井林太夫

(朱書)

「百五拾四」

三月七日御場所為見置罷越候姓名

御中間頭

荒井林太夫

同組頭

田中彦兵衛

賄役三人之内 小金井長三郎

野方五人之内 黒沢昇一郎

山口吉次郎

竹中藤十郎

世話役組老人宛 田野村勝三郎

(朱書)

「百五拾五」

御勘定奉行衆

来春小金御鹿狩 御成ニ付御場最寄人留御締ニ可相成村々為

取調、在方出役之者八人近日罷越候ニ付、此段御代官所より右

村方江兼而御申渡置御座候様仕度奉存候、以上

十一月

御中間頭 御小人頭

(朱書)

「百五拾六」

御中間頭  
御小人頭 江

一、在方出役

壹 人

右者当春小金御鹿狩ニ付 御成三日以前船橋町江着、御前々日早朝より佐倉街道大和田村・萱田町之方江之往来人馬堅差留候積、尤船橋町より藤崎村・大久保村・実籾村・長作村・犢橋村并長沼新田通并谷津村・久々田村・鷺沼村・馬加村・検見川村・稲毛村・黒砂村道上総街道之方者往来不及差留、但往来横切北之方江者警飛脚躰之者たりとも決而不相同、農業道其外小道共固差留候積、勿論勢子其外人足或者医師・取揚婆々等者先々承糺無遅滞可相通候、右之趣廻状触認メ置、出役之者船橋町江着致し候ハ、即刻右之廻状触前書上総道筋両往還村々江差出、出役之ものハ船橋村前原新田辺ニ罷在、其外村々者時々見廻無油断様御取締申付候積、勿論佐倉之方者同所城主より役人差出御取締申付候筈之事

一、在方出役

壹 人

右者我孫子村江 御成より三日以前着、御前々日未明より同所より東之方ハ青山村、西之方者根戸村・柏原往還筋往来者勿論、往還横切南之方江者尚更、警飛脚躰之ものたり共決而不相同積、村里り農業道其外小道も固差留、勿論勢子其外人足又者医師・取揚婆々等者先々承糺無遅滞相通可申候、右之趣廻状触認置并利根川向取手町江も同所より川を越南之方江一切通間敷、勢子其外人

足・医師・取揚婆々等者右同様取計候様右村々江申触、出役之もの者我孫子村・根戸村辺大切ニ見廻り御取締可申付候事

一、在方出役

壹 人

右者小金上町新田江 御成より三日以前着、御前々日未明より同所より西江向小金新田・中新宿村・小金町・二ツ木村・馬橋村・中根村・竹ヶ花村・大根本村往還筋往来者勿論、往来筋を横切、御場之方江者猶更、警飛脚躰之ものたり共決而不相同様、村里り農業道其外小道とも固差留、勿論勢子其外人足又者医師・取揚婆々等者先々承糺無遅滞相通可申候、右之趣廻状触認置、場所着早々触出、出役之もの者小金上町新田ニ罷在、若閑宿之方より紛参り候ハ、同所ニ而堅差留候積、御取締申付其余村々者可成丈見廻り無油断様御取締可申付事

一、在方出役

壹 人

右者竹袋村江 御成より三日以前着、御前々日早朝より布佐川村并川向布川村渡舟ニ而勢子其外人足・医師・取揚婆々等之外者一切渡舟不致積并大森村・和泉村・同所新田江も御場之方之小道・農業道等其外印西牧固木戸ニ而旅人躰之もの者差留、医師・取揚婆々等者前書之通取計候積、廻状触認竹袋村江着次第申触、出役之もの者大森村・和泉新田辺無油断見廻り御取締可申付事

一、在方出役

拾 人

右者御場廻り江手分いたし 御成より三日以前八ヶ崎村・増尾村・佐津間村・軽井沢新田・白井新田・中沢村等之内江着いたし、金ヶ作村・日暮村・河原塚新田・逆井村・高柳村・塚崎村・藤出村・佐津間村・栗野村・軽井沢新田・中木戸新田・白井新

田・神保新田・八木ヶ谷村・鎌ヶ谷村・道野辺村・中沢村・大町  
新田・串崎新田・紙敷村・田中新田・八ヶ崎村・栗ヶ沢村・千駄

堀村・酒井根村・増尾村右村限りニ原内之方江相通候者、勢子・

其外人足并医師・取揚婆々等、先々承札無遅滞様相通、其余旅

人躰之もの者堅通間敷旨、右村々江廻状触認置、場所着次第銘々

持場限申触、無油断見廻り御取締申付候事

右者小金御鹿狩之節在方出役之もの江書面之通相心得候様可申渡  
候、尤絵図面差遣候間一覽之上早々可相返事

正月

遠山半左衛門  
石谷鉄之丞

(朱書)

「百五十七」

御勘定奉行衆

一、当春小金御鹿狩 御成ニ付御書面・絵図面共御下ケ被成下拜見奉

畏候、右者遠路欠隔候御場所之儀ニ付見置不申候而者御差支之儀

も難計奉存候間、去十一月申上候通村方為取調在方出役名面之

もの、明後十八日出立罷越候間、此段御代官所より村々江御申

渡御座候様仕度奉存候、以上

正月

御中間頭  
御小人頭

(朱書)

「正月十六日

此度廻村之村々ヶ所附

御鷹野役所江差出ス

村方取調出役正月十八日出立  
廿二日夕帰着

在方出役  
宮川重太郎  
高谷龜之助  
水橋佐一郎  
小泉金蔵  
宮川彦五郎  
今井安五郎

木村伝蔵  
石崎兵吉

(朱書)

「百五拾八」

小金御鹿狩 御成ニ付  
在方人留之儀ニ付奉伺候書付

御中間頭  
御小人頭

小金御鹿狩 御成之節、在方人留之儀ニ付先達而御書面并絵図面

共被成御下拜見奉畏候、右者遠路欠隔居候御場所之儀ニ付出役之

者前以御場所見置不申候而者御差支之程も難計奉存候間村々取

調候趣左之通奉伺候

一、寛政度御鹿狩之節之書面睨与不仕絵図面等も無之相弁不申候得

共、此度御下ケ有之候絵図面之儀者寛政度之御振合与奉存候、右

之節者在方人留之義御目付方江引請間合も無之義ニ付、当時之御

振合与相違仕候義も可有御座哉与奉存候、依之私共一同厚評議仕

御取締向專要相心得取調候処、いかにも御場広之儀ニ御座候間

時々見廻等仕候ニ付而者何分拾五人ニ而者手足り不申、不輕御締

筋御手薄ニ相成万一御差支之義出来仕候而者奉恐入候間、寛政度

も郡代方より五人程御雇仕候歟ニ承知仕候間、左候得者都合式拾

人ニ而相勤候義与奉存候得共、御近例遠 御成之御振合見合候

ハ、多人数増人等相願度奉存候得共、先年之御振合を以被仰渡

候義ニ御座候間、此度之儀者御中間・御小人ニ而拾人助被 仰付

都合式拾五人ニ而精々申合御差支無之様可相勤候間、右増人之儀

被 仰付被下置候様仕度奉存候、則別紙絵図面之通出役仕候得

者御立場最寄其外共出役場所格別相離不申御締嚴重ニ相成御用

弁宜奉存候間此段奉伺候



一、寛政度之書留無之相分り兼候得共、外遠 御成之御振合ニ見合  
 候得者松戸より千住迄之間出役之者罷出候方御取締ニも相成可  
 然奉存候間奉伺候、伺之通被仰渡候ハ、人留之儀如何相心得可  
 申哉、千住より 御成道之儀者外村々之通 御成前々日より  
 留切、千住より江戸并草加通り往還之儀者御前日暮六時より留切  
 還御相濟候迄留切候様可仕哉

一、葛西筋・淵江筋 御成之節、御道筋ニ寄金町松戸・小岩市川御  
 関所江御当日人留之儀相達候間、此度之儀も外村々之趣ニ相心得  
 可申旨出役之ものより相達可申哉

一、遠 御成之節是迄左之通村々江相達候間此度之儀も御書面之趣  
 認加候様可仕哉

廻状本文九ヶ条  
 右者寛政度人留出役御目付方江被 仰付候節、御代官大貫次  
 右衛門より受取今以其儘相用申候

右之通奉伺候、以上  
 酉二月 在方出役之者

右之通在方出役之者申聞候間、絵図面相添此段奉伺候、以上

酉二月 御中間頭  
 御小人頭

御附札

書面千住宿より御場入口迄者横道・小道共 御成 還御之  
 節計郡代ニ而人留致し、新宿より市川之方船橋町上総国江之  
 往来并千住より日光道中粕壁宿迄之儀者 御成 還御之節  
 計往来差留候様右道筋宿々・村々江道中奉行より村触いた

し候積伊勢守殿江伺済有之候、且松戸・酒井根・鎌ヶ谷等者  
 御先手勤番所有之候ニ付右場所江止宿ニ不及候

一、廻状案文之内女人之儀、先達而相達候趣も有之候間相除候様可  
 致候、右之外兼而達之通医師・取揚婆々等之ヶ条者認加可申候、  
 其外之義都而先達而相達候書面・絵図面之通可相心得候

出役箇所附

一、船橋町

浅井七三郎組  
 小泉金蔵

前原新田 滝台新田 薬園台新田 大和田新田 大和田村  
 萱田村 萱田町 西夏見村 東夏見村 前貝塚村  
 後貝塚村 七熊村 米崎村 下飯山満村 上飯山満村  
 高根村 行田新田 金杉村

左之式拾ヶ村者上総国江之往還筋者人留不致、御場之方江之横  
 道計人留之積相触

谷津村 久々田村 鷺沼村 検見川村 稻毛村  
 黒砂村 藤崎村 大久保村 実籾村 犢橋村  
 長沼新田 竹石村 天戸村 田木ノ井村 三山村  
 今漆新田 高津村 高津新田 花島村 馬加村

一、我孫子村

榊原栄五郎組  
 木村伝蔵

我孫子新田 呼塚村 根戸村 戸張村 根戸新田  
 芝崎村 青山村 大鹿村 取手宿 高野山村  
 岡保戸新田 岡保戸村 都部村新田 都部村 中峠村



中里村 下ヶ戸村 柏村  
布施村 宿蓮寺村 花ノ井村

一、竹袋村

近藤勝平組  
石崎兵吉

発作新田 八幡新田 亀成新田 浦辺村 鹿黒村  
大森村 別所村 小林村 平塚村 和泉村  
泉新田 惣塚新田 六間新田 布佐村 布佐下新田  
相島新田 浅間前新田 大作新田 新木村 日秀村  
下ヶ戸村 江蔵寺村 竜眼寺村 松虫村 滝村  
萩原村 笠神村 深間村 野原新田

一、小金上町新田

杉野甚平組  
今井安五郎

小金町 根本内村 久保平賀村 中新宿村 向小金新田  
今谷新田 東平賀村 平賀村 幸田村 前ヶ崎村  
松ヶ崎村 中村 思井村 西平井村 鱈ヶ崎村  
横須賀村 中金杉村 大谷村 殿平賀村 篠籠田村  
名都借村 駒木村 野々下村 市ノ谷村 後平井村  
加村 流山村 大畔新田 重太夫新田

一、佐津間村

榑原栄五郎組  
宮川重太郎

高柳村 藤ヶ谷村 同新田 金山村 箕輪村  
手賀新田

一、紙敷村

杉野甚平組

田中新田 高塚新田 曾谷村 貝塚村 宮川彦五郎  
稻越村 須和田村 菅野村 和名ヶ谷村 秋山村  
大橋村 上矢切村 中矢切村 下矢切村 栗山村  
国府村 国府台村 真間村 近藤勝平組  
山本孝三郎

一、逆井村

近藤勝平組  
山本孝三郎

藤心村 酒井根村 増尾新田  
中沢村 大町新田 串崎新田 大野村 河原塚村 奉免村  
千束村 北方村 古八幡村 深谷与十郎

杉野甚平組  
深谷与十郎

一、道之辺村

志賀長十郎組  
水橋佐一郎

鎌ヶ谷村 丸山新田 若宮村 藤原新田 上山新田  
柏井村 古作村

一、神保新田

浅井七三郎組  
野田広吉

富ヶ沢村 法目村 白井新田 長殿村 富ヶ谷村  
八木ヶ谷村 金堀村 桑橋村 桑納村 島田村  
平戸村 麦丸村 吉橋村 坪井村 古和釜村  
楠ヶ山村 大穴村 海老作村

一、千駄堀村

荒井林太夫組  
有賀市郎次

松戸新田 金ヶ作村 同新田 日暮村  
中和倉村

外河原村

木村

七右衛門新田

大谷口新田

一、中木戸村

志賀長十郎組  
長田久太郎

軽井沢新田 栗野村 名内村 白幡村  
小倉村 七次村

(朱書)

「百五拾九」

村々江申渡候廻状面

来ル十八日小金御鹿狩 御成ニ付

一、火之元太切可致、万一乱心もの等有之候ハ、昼夜とも番人附置  
外江出さる様可申付事

一、塚崎村

荒井林太夫組  
青木三次郎

大島田村 大井村 岩井村 鷲ヶ谷村  
染井村 布瀬村

一、御場先江出家・沙門・行人・山伏都而人馬不出様横道・小道等迄  
致縄張、明十六日未明より村役人附居旅人者一切、譬飛脚躰之

ものたりとも決而不相通、勿論勢子其外人足或者医師・取揚婆々  
等者先々承糺無遲滞相通シ可申事

一、川附有之村々者舟・筏留可申付事

一、村々馬持之分者馬繫留可申付事

一、御見通之村々者御当日一日野留可申付事

一、村々若出火有之候歟又者相替儀有之候ハ、早々書面を以我等休  
息所江可相届事

一、白井宿

近藤勝平組  
青木良太郎

武西村 吉高村 松尾村 戸神村  
安養寺村

差上申御請書之事

来ル十八日小金御鹿狩 御成ニ付人留御締為御用被成御出役

御触書を以被仰渡候御箇条之趣、村内小前老人別申渡堅為相守、  
火之元之義者別而大切ニ仕、且往還并横道・小路等迄縄張いたし、  
明十六日未明より村役人附居御場之方江人馬不出様締仕、勿論

一、二ツ木村

志賀長十郎組  
秋山平次郎

馬橋村 中根村 本郷村 新作村  
小根本村 岩瀬村

花島村 竹ヶ花村 大根本村 古ヶ崎村

八ヶ崎村 栗ヶ沢村 上総内村 幸谷村

九郎右衛門新田

三村

伝兵衛新田

三水新田

勢子其外人足或者医師・取揚婆々等者先々承糺無遲滯相通可申旨  
奉畏候、依之村役人連印之御請書差上申処仍如件

何之誰御代官所  
何之誰知行所

総州何郡何領

何村

年寄

嘉永二酉年三月十五日

名主

誰

印

御目付方在方御出役

何之誰様

(朱書)

「百六拾」

覚

一、来ル十八日小金原筋江 御成ニ付在方出役

御蠟燭八拾挺

是者 御成前村方取調出役八人、老入ニ付拾挺宛、但五夜分

同式百式拾五挺

是者御時節出役拾五人、老入拾五挺宛、但五夜分

ズ二百五挺

右之通三月十一日当番所より請取、且請取書付常 御成之節之振

合ニケ所附相認差出ス

(朱書)

「百六拾卷」

請取申御手当銀・木錢・本馬駄賃之事

合 銀百四拾四匁  
錢貳拾三貫四百拾六文

内訳

銀百四拾四匁

是者村方取調出役八人、当正月十八日出立同廿三日夜帰着、

此延日数四十八日、延人数四拾八人、但一日老入ニ付銀三

匁宛

錢三貫四百拾六文

是者前同断ニ付上下木錢拾六人、五泊六昼分、但上老入ニ

付一泊三拾五文・一昼拾七文、下老入ニ付一泊拾七文・一

昼八文宛

錢貳拾貫文

是者前同断ニ付本馬老疋從江戸下総国葛飾郡松戸宿・同国千

葉郡馬加村・同郡大和田村・同国印幡郡竹袋村・同国相馬

郡取手宿近辺所々往返共里数六拾里、此延里数四百拾八里、

但馬老疋ニ付一里四拾文宛

右者小金御鹿狩ニ付人留場所村方取調出役御手当銀并木錢・本

馬駄賃、書面之通請取申処仍如件

嘉永二酉年二月

御小人頭

近藤勝平

榎原栄五郎

志賀長十郎

御中間頭

杉野甚平

荒井林太夫

浅井七三郎

築山茂左衛門殿

青山録平殿  
齋藤嘉兵衛殿

(朱書)

「百六拾貳」

御勘定奉行衆

覚

一、当三月十八日小金原筋江 御成之節

人留出役

拾五人

五夜泊

右之通出役差出申候ニ付御勘定所江御達御座候様仕度奉存候、以

上

三月

御中間頭  
御小人頭

(朱書)

「百六拾三」

請取申御手当銀并木錢・本馬駄賃・筆紙代銀之事

合 銀貳百七拾匁八分八厘五毛  
錢拾八貫九百六文

内

銀貳百七拾匁

是者出役拾五人三月十四日出立同十九日夜帰着、此延日数  
九十日、延人数九拾人、但一日老人ニ付銀三匁宛

錢六貫四百六文

是者前同断ニ付上下木錢三拾人、五泊六昼分、但上老人ニ付  
一泊三拾五文・一昼拾七文、下老人ニ付一泊拾七文・一昼  
八文宛

錢拾貳貫五百文

是者前同断ニ付本馬老疋江戸より下総国葛飾郡小金上町新  
田・同郡船橋町・同国千葉郡神保新田・同国印幡郡白井村・  
同竹袋村・同国相馬郡我孫子村近辺所々往返共里数貳拾里、  
此延里数三百里、但馬老疋ニ付老里四拾文宛

銀八分八厘五毛

是者筆紙代銀、但 御成老度分

右者当三月十八日小金原筋 御成之節人留出役御手当并木  
錢・本馬駄賃・筆紙代銀書面之通請取申出仍如件

嘉永二酉年三月

御小人頭

近藤勝平

榊原榮五郎

志賀長十郎

御中間頭

杉野甚平

荒井林太夫

築山茂左衛門殿  
青山録平殿  
齋藤嘉兵衛殿